

【DAY1 チャプター1】

☆時刻：昼 場所：バス停前

(◇バスの扉が開く音)

▲主人公がバスから降りる

C ⑦ 母「おい！ こっちだ、こっち」  
(※遠くから)

(◇上記台詞部分で自転車の鈴の音)

▲主人公がお母さんの乗る自転車に近づく  
(※普通)

B ① 母「久しぶりだなー。しばらく見ない間に、大人っぽくなったんじゃないか？」  
^\*「見ない間」驚き^

B ① 母「ああああ（\*大袈裟に落胆）お前見てると自分も年食ったなあって実感するよ」

B ① 母「ほんと、いつの間にこんなに立派になったんだか」

▲間

B ① 母「どうだ？ 向こうでは元気にしてたかー？」

B ① 母「ん???」

B ① 母「あはははは。その顔。社会人になってやられてるーって顔だな。  
まあでも、身体は壊したりしてないんだろ？」

B ① 母「それなら大変よろしい。若い奴はとにかく元気にしてるのが一番だから」

▲間

B ① 母「うちの旦那が出張なのは……伝えたよな？」

B ① 母「いやー、旦那も会いたがってたんだけどね」

B ① 母「ただ今年はどうしても外せない仕事が入ったらしくて  
こっちに戻れないんだと」

B ① 母「で、悪いんだけど、泊まってる間、時間ある時でいいから  
ちび助と遊んでやってくれるか？」

B ① 母「そそ、私のかわいいかわいい自慢の娘たち」

B ① 母「上の方は昔もよく遊んで貰ってたよな？」

B ① 母「そーそー。へらへらしてお前の後ろによく引っ付いて」

B ① 母「小さい頃だったから、当の本人は多分もう覚えてないけどな」

▲短い間

B ① 母「いやー、お前が引越した時は大変だったんだぞ」

B ① 母「『お兄ちゃんが消えちゃったー』って毎日泣いてばっかで  
今思うとほんと懐かれてたんだな」

▲間

B ① 母「ま、そこら辺の話はまた後ですとして」

B ① 母「うちの家までの道、覚えてるか？」

B ① 母「そっか。なら一人で問題ないな。  
あたしは、このまま街の方まで買い物出ちゃうから」

B ① 母「それじゃチビたちの事よろしくな」

▲お母さんが自転車に乗って移動開始

(※遠くから)

C ① お母さん「晩飯、期待して待ってろよー」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター2】

☆時刻：昼過ぎ 場所：玄関・廊下・部屋

▲主人公が宿泊先の扉に歩いて近づく  
(◇上記▲に付随する音)

▲主人公が呼び鈴を押す  
(◇上記▲に付随する音 呼び鈴音 SE『ビー』)

(◇ヒロインボイス扉越し)  
(※距離：遠い 方向：正面)

C ① 紬「はい、今行きまーす」

▲紬が扉を開ける

(◇ガラガラという扉の開く音)

(◇ヒロインボイス扉越し解除)

B ① 紬「お久しぶりです、お兄さん！  
……この呼び方で合ってますよね？」^\*「この呼び方で」疑問▽

B ① 紬「(\*小さく笑う) すみません。  
小さい頃だったので、あまり覚えていなくて。母からお話は伺ってます」

B ① 紬「???」 ^\*首を傾げる感じ▽

B ① 紬「どんな話って……いたって普通の話ですよ？」

B ① 紬「昔はうちの近所に住んでいて、よく私も遊んで貰っていたという話とか」

B ① 紬「あと、今日からうちに泊まっていくんですね」

B ① 紬「ささ、どうぞ中へ入ってください」

▲間

B ① 紬「???」 ^\*首を傾げる感じ▽

B ① 紬「どうしたんですか、急に黙って」

B ① 紬「あれ？ も……もしかして人違いでしょうか？」

B ① 紬「で、でしたら今の話は聞かなかったことというかご内密にというか」^\*わたわた▽

B ① 紬「え？ 大きくなった……」

▲間

B ① 紬「(\*溜息) もう！ びっくりさせないでくださいよ」

B ① 紬「危うく、知らない人を玄関に通しちゃったのかと思ったじゃないですか」

▲間

B ① 紬「でも、お兄さんの中での私が成長出来てるみたいで良かったです」

▲短い間

B ① 紬「（＊咳払い）えゝそのその、改めまして、長女の白川紬です」

B ① 紬「お兄さんがこちらにいる間、家の中の案内を任されてますので気軽になんでも聞いてくださいね」 ^\*優しく▽

B ① 紬「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」 ^\*優しく▽

▲間

B ① 紬「ふと気になったんですけど、お兄さんがこの村にいられた目的ってなんでしよう？」

B ① 紬「別段、観光地ってわけでもないですし住んでいる私が言うのもあれなんですけど、なーんにもない田舎なので」

▲間

B ① 紬「ふむふむ……。『夏休みに懐かしさと癒しを求めて』ですか」

B ① 紬「うーん…私はまだ、大人の人が言う『懐かしい』っていうのがいまいちピンとこないですけど」

B ① 紬「でもまあ、癒しという事ならこの村はうってつけになりそうです」

B ① 紬「空気は澄んでいてのんびりしてますし見ての通り自然が溢れすぎてるくらいですから」 ^\*笑いつつ▽

B ① 紬「明日から色んなお勧めのスポットに案内しますね！」

▲間

B ① 紬「大人の人の夏休みって考えると……やっぱり、滞在期間は結構短いんでしょうか？」

B ① 紬「二日半…ですかぁ。正直、思ってたより短いので残念です」

▲間

B ① 紬「でもでも、仲良くなるのに時間の長さは関係ないと思うんです！だから滞在中、たくさんお話できれば嬉しいです！」

▲間

B ① 紬「その、実は私、お兄さんが泊まりに来るのをかなり楽しみにしていたので」 ^\*もじもじ▽

B ① 紬「だって、ほんとのお兄さんが出来たみたいじゃないですか。（＊小さく笑い）だからすごくワクワクしちゃって」 ^\*もじもじ▽

▲少し長めの間

B ① 紬「あのー…話のついでに、あともう一つだけ質問してもいいですか？」

B ① 紬「ありがとうございます。」

その………実はどうしても気になる事がありました」  
「\*「実はどうしても」力を込めて」

B ① 紬「………お兄さんって、今は都会に住んでるんですよね？」\*息をのむ感じ」

▲長めの間

B ① 紬「……くう〜！ いいな〜！」\*目が星になる感じ」

B ① 紬「私、行ったこと無いんですけど、前に花火大会の中継を見たんです！」\*はしゃぐ」

B ① 紬「何から何までこの村と全然違いました！  
綺麗な都会の夜景をバックに、何発も何発も大きな花火が上がって」

B ① 紬「（\*溜息）………いつか行ってみたいんです。

………あの景色を生で見れたらどんな感じなんだろうって」\*少し独り言っぽく」

▲間

B ① 紬「よかったら、あとで色んなお話聞かせてくださいね！」

▲短い間

B ① 紬「さてと」\*独り言」

B ① 紬「玄関で長々話しちゃいましたね。（\*小さく笑う）すいません」

B ① 紬「ささ、今度こそほんとにあがってください。靴は適当に脱いじゃって大丈夫ですから」

B ① 紬「はい。滞在中はお兄さんのお家だと思ってもらえると嬉しいので。  
ばいばーいってそこら辺に置いて下さい」

B ① 紬「あ、もちろんちゃんと綺麗に並べて貰えれば、もっと嬉しいんですけどね」  
\*笑いつつ」

B ① 紬「えーっと。

まずは、お荷物が結構あるので、とりあえずお兄さんのお部屋に行きましょうか」

B ① 紬「あ、私も運ぶの手伝いますね」

B ① 紬「よいしょっと」

▲紬が主人公の荷物を持つ

B ① 紬「では、こちらです」

▲紬が先導して、主人公を部屋へ案内  
(◇歩く音 適宜)

B ① 紬「この間妹と掃除はしたので綺麗なはずなんですけど」

B ① 紬「元がおんぼろな家なので、汚れが残っちゃってたらごめんなさい」\*笑いつつ」

▲紬と主人公立ち止まる

▲紬が部屋の扉を開ける  
(◇上記▲に付随する音)

B ① 紬「じゃーん！ 到着です。ここがお兄さんに泊まっていたくお部屋になります」

B ① 紬「あ、適当に荷物おろしちゃってください。見てるだけですごく重そうですから」  
^\*笑いつつ^

▲主人公が入室し、荷物をおろす  
(◇上記▲に付随する音)

(距離：多少あり 方向：背面)

B ⑤ 紬「この向かいが私と妹の部屋なので  
何か困った事があったらいつでも呼んでくださいね」

B ⑤ 紬「というより……まずは挨拶しなきゃですよ。  
ちよっと妹呼んできますんで、お兄さんはゆっくり荷解きでもしててください」

▲紬が扉を閉めて部屋を離れる  
(◇上記▲に付随する音)

▲主人公は荷解きしたり、適当に待つ  
(◇適宜 それなりに時間使ってもらって)

(※距離：栞と紬のボイス 部屋の外から)

C ① 紬「栞～おきなさ～い！ もうお兄さん来ちゃってるよ！」

C ① 紬「寝ぼけないの。  
お母さんが『今日から泊まりに来るからよろしくね』って言ってたでしょー」

C ① 紬「ほくらっ！ 挨拶しに行かないと、おやつ抜きにするよー」

C ① 栞「やだー！ー！ー！」^\*大声^

C ① 紬「だったらしっかり目を覚ませてくださーい」

▲長め間

▲紬と栞が近づいてくる  
(◇上記▲に付随する音 適宜)

(※距離：普通 方向：正面)

C ⑧ 紬「お兄さん、お待たせしました。入りますよー？」

▲紬が扉を開ける

B ② 栞「??? 知らないお兄さんがいる」 ^\*「???」 部分は首を傾げる感じ^

B ⑧ 紬「ほら、栞！ちゃんと挨拶して！」

B ② 栞「おいさんだれ？」

B ⑧ 紬「栞～！」 ^\*ゴゴゴゴって怒る感じ^

**B ⑧** 紬「挨拶の仕方ちゃんとお教えたよね？」　　△\*怒っている▽

**B ②** 栞「きゃー！　お姉ちゃん怒ったー！」　　△\*キャツキャ▽

▲上記台詞後、主人公の傍に走る

**B ⑧** 紬「ちゃんと挨拶ができない人には、頭ぐりぐりの刑が待ってるぞ」

**A ④** 栞「ぐりぐり痛いからやだ！　わかった！　栞挨拶ちゃんとする！」

▲上記台詞部分　栞は主人公の背中側にいる

**B ⑧** 紬「よろしい。じゃあもっかいこっちきて」

▲栞が紬の横へ移動

**B ②** 栞「えっと……白川栞です！　おいさん、よろしくますっ」

**B ⑧** 紬「おいさんじゃなくて、お・に・い・さ・ん……だよね？  
あと『よろしくお願いします』」

**B ②** 栞「お、おい、おい……？」

**B ⑧** 紬「お兄さん」

**B ②** 栞「お、お兄さん？　白川栞ですっ！　よろしくおねがいますっ」

**B ⑧** 紬「ごめんなさい。普段はちゃんと挨拶できるんですけど、ちょっと寝ぼけてるみたいで」

**B ②** 栞「お姉ちゃん、このおいさん誰？」

**B ⑧** 紬「うん……まだ寝ぼけてるな。（\*小さく溜息）  
よし栞、居間でお菓子食べに行こっか？」

**B ②** 栞「お菓子？　栞、お菓子食べるー！」

**B ⑧** 紬「ごめんなさいお兄さん。すぐ戻ってきますので、ちょっと行ってきますね」

**B ⑧** 紬「ほら栞、行くよ。ちゃんとお兄さんにさよならして」

**B ②** 栞「うっ（\*頷き）。おいさん、ばいばい」

▲紬と栞が部屋から出る  
（◇引き戸を閉める音）

▲栞と紬部屋から廊下へ移動  
（◇上記▲に付随する音　適宜調整）

▲廊下で紬と栞が立ち話  
（※廊下から）

**C ①** 栞「おいさん、あとで遊んでくれるかな？」

**C ①** 紬「どうだろうね。栞がちゃんといい子にしてたら遊んでくれるんじゃないかな」

C① 紬「あとさー『お兄さん』だよ？ その『おいさん』って呼び方、変だからね」

C① 栞「おいさんは、おいさんだよ？ 栞、おいさんがいい！」

C① 紬「うーん……まあでも、とりあえずはいいのかな。  
とくに失礼っぽくはない呼び方だし」

C① 紬「あ、そうだ栞。

お姉ちゃん、多分あとでお買い物行かなきゃだから、その時はいい子にしてるんだよ」

C① 栞「栞もお買い物いくー」

C① 紬「ダメ。栞がいないとお兄さんが一人で困っちゃうから」

C① 栞「やだ！ 栞も行く」

C① 紬「あー、じゃあ残念だけど、お菓子は無しになっちゃうかなあ〜」

C① 紬「お兄さんが分からない事があった時に  
栞が助けてあげてると思うてのご褒美だしな〜」    ^\*わざとらしくV

C① 栞「やだ。お菓子たべたい」

C① 紬「ダメです〜。ちゃんとお姉ちゃんの言うこと聞かない人にはあげませーん」  
^\*わざとらしくV

C① 栞「やだやだやだ！ お姉ちゃん、けちんぼだよ」

C① 紬「あれー？ 今なんか『けちんぼ』とか聴こえた気がするけど  
きつとお姉ちゃんの気のせいだよね〜？」    ^\*わざとらしくV

▲間

C① 栞「お……お……お」

C① 紬「???? どしたの？」 ^\*「????」は首を傾げる感じV

▲間

C① 栞「お姉ちゃんの、けちんぼおばさーん」

▲トテトテ走って逃げる栞  
▲遠くに向けて二人が移動  
(※距離：遠のいていく 方向：適宜)

C① 紬「あー！ そんな事言っちゃだめでしょー」

C③ 栞「（\*笑いながら）けちんぼおばさんだー」

▲ゆっくり追う紬

C② 紬「こら、どこいくのー。お姉ちゃんにそんな事言っちゃだめなんだからね！」

▲二人とも廊下の奥へ  
(◇適宜 フェードアウト)

【チャプターEND】



【DAY1 チャプター3】

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋

▲長めの間（夏の音を聞く時間）

▲紬が扉をノック

（※距離：扉越し）

C ⑧ 紬「お兄さん、ちょっといいですかー？」

C ⑧ 紬「ありがとうございます。入りますね」

▲扉を開けて紬が部屋の中へ

（※距離：普通 方向：正面）

B ① 紬「じゃじゃーん。」

近所のおばあちゃんからお団子を貰ったので、よかったら一緒にいかがですか？」

B ① 紬「（\*クスツと笑う）よかった。小腹が空いてるなら丁度いいですね」

▲上記台詞を言いつつ紬が主人公の隣へ移動

A ⑦ 紬「では、お隣にお邪魔します」

（※距離：近い）

A ⑦ 紬「とりあえず机の上にお団子広げちゃいますので、適当につまんでください」

▲紬が目の前の机に団子を広げる

A ⑦ 紬「では、優しいおばあちゃんに感謝して」

▲紬が手を合わせる

A ⑦ 紬「いただきま〜すっ」

▲紬と主人公がお団子を食べる

A ⑦ 紬「（\*団子を食べるアドリブ）」

A ⑦ 紬「んーっ、おいしい〜」

A ⑦ 紬「あ、お茶もついでおきますね」

▲ヒロインがグラスを二つだしてお茶を注ぐ

A ⑦ 紬「あの、さっきはバタバタしちゃってごめんなさい」

A ⑦ 紬「葉ったら、またお昼寝しちゃってます」ハ\*優しくV

A ⑦ 紬「なーんていうか、普段は元気すぎるくらい妹でして  
……根は優しくていい子なんですけどね」

▲問

A ⑦ 紬「えっ？ 子供は元気があるほうがいい？ ……ですか」

A ⑦ 紬「うーん……確かに子供は元気があるのが一番なんですけど姉としてはもうちょっと落ち着いてほしいというか」

▲間

A ⑦ 紬「（\*クスツと笑う）まあ、なにはともあれ。お兄さんが優しい方でよかったです」

A ⑦ 紬「変な呼び方して、さっそく呆れられてるんじゃないかってひやひやでした」

A ⑦ 紬「うちにいる間、あの子この部屋に押しかけて来ちゃうと思いますけど」

A ⑦ 紬「そのー、邪魔にならない程度でいいので、一緒に遊んで頂けると助かります」

A ⑦ 紬「やれ虫取りー、やれ川遊びーって具合に、私一人だと全然手におえないんです」  
^\*笑いつつv

▲間

A ⑦ 紬「そういえば、まだ母が帰ってなくて……えっ？ もうバス停で会ってたんですか!？」

A ⑦ 紬「（\*ため息）そうだったんですね。迎えに行くなら行くで、一言教えてくれたっていいのに」（ちょいふて気味）

A ⑦ 紬「その、母は何か言っていましたか？」

A ⑦ 紬「あー、やっぱり街の方まで買い物に出ちゃったんですね」

A ⑦ 紬「（\*小さく笑う）お兄さんが来るという事でいつもより晩御飯の準備に気合が入ってましたから」^\*笑いつつv

A ⑦ 紬「んー、でもそれなら、結構時間かかりそうだし……」

A ⑦ 紬「はい。ここで、この机で。一人で部屋にいるのも退屈ですし、それに、ここだとお兄さんに質問もできちゃいますからっ」（\*「それにー」いたずらっぽく）

A ⑦ 紬「ダメ、ですかね？ お兄さんのお邪魔にはならないつもりなんですけど」

▲間

A ⑦ 紬「ありがとうございますっ」

A ⑦ 紬「では、部屋から宿題持ってきますね」

▲紬が立ち上がる

A ⑦ 紬「ふふっ、これでわからない所があっても安心ですっ」^\*笑いつつv

▲紬が部屋を出て宿題を取りに行く  
(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

## 【DAY1 チャプター4】

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋

(◇※このパートは 夏の音、宿題をする鉛筆の音などがメインとなります)

(◇環境音など適宜)

▲紬が戻ってきて、宿題を始める所からスタート

▲紬が宿題を机の上に広げる

B ① 紬「さてと。ではお言葉に甘えて、宿題、はじめちゃいますね」

B ① 紬「まずは……この問題集からっと」

▲上記台詞を言いつつ問題集を開く

♪S

▲紬が宿題を開始

▲紬がしばらく宿題を続ける

▲紬が手を止める

(◇動作音 筆記用具の音やページをめくる音など 一旦停止)

♪E

B ① 紬「お兄さん？」

B ① 紬「ぼーっとこちらを見てますが、どうかしましたか？」

▲短い間

B ① 紬「夏休みの宿題が懐かしい、ですか？」

B ① 紬「(\*小さくため息) 大人になると、そういう感覚になるものなんですかねー」

B ① 紬「今はこんなにめんどくさいのに。なんだか不思議です」

B ① 紬「(\*小さく笑う) 私もいつか、笑顔で眺めるようになる事を祈ってます」

▲短い間

B ① 紬「(\*小さく一呼吸) さーって、もうひと踏ん張りしよっと」

B ① 紬「あ、お兄さんまで座ってなくても大丈夫ですよ。  
のんびり横にでもなっていてください」

B ① 紬「はい、どうぞどうぞ。私はあと少しなんで、ここからラストスパートです」

▲紬が宿題再開 【以下ASMR(勉強してる所作音と環境音)】

(チャプターEND)

【DAY1 チャプター5】

☆時刻：昼過ぎ 場所：部屋

▲紬が宿題をしている 主人公は寝落ちしてる状態でスタート

(◇環境音など適宜)

(◇紬が宿題をしている動作音)

C ① 紬「よーっし、これでつと。問題集おしまーい」ハ\*独り言▽

▲上記台詞「これでつと」部分で紬が手を止める

(◇動作音 筆記用具の音やページをめくる音など 停止)

C ① 紬「ふうー。結構進んだかなあ」ハ\*満足そうに▽

C ① 紬「集中してると、あんまり気にならなかったですけど、暑くないですか？ お兄さん」

▲間

C ① 紬「?..?」

C ① 紬「あれ？」ハ\*疑問独り言っぽく▽

C ① 紬「あの一、お兄さん。聞こえてませんかー」ハ\*軽く呼びかけ▽

▲紬が移動して、主人公の顔を覗き込む

B ⑧ 紬「あ」

B ⑧ 紬「(\*小さく笑い) お兄さん、寝ちゃってる」

▲長めの間

B ⑧ 紬「寝顔、かっこいいかも」ハ\*優しく独り言▽

▲間

B ⑧ 紬「.....! (\*ハツとする感じ)」

B ⑧ 紬「いけないいけない、見とれちゃってたよ」

▲間

B ⑧ 紬「いいよなあ、年上のお兄ちゃんって」ハ\*独り言っぽく▽

B ⑧ 紬「家では私がお姉ちゃんだから、その反動なんだろうけど」ハ\*独り言っぽく▽

▲間

B ⑧ 紬「(ため息) 一度でいいから、私も兄弟に甘えてみたいな」ハ\*独り言っぽく不満▽

▲間

B ⑧ 紬「あ、……そうだ」ハ\*思いついた感じ▽

B ⑧ 紬「いい事思いついちゃった。  
せっかくのチャンスなんだからお兄さんに甘えちゃおっと」ハ\*独り言っぽく▽

▲短い間

B ⑧ 紬「と、その前に。栞がまだ起きてないか確認しとかなきゃ」ハ\*独り言っぽく▽

B ⑧ 紬「お母さんに知られたら、子ども扱いされそうだし」

▲紬が部屋を出て栞の様子を見に行く

▲紬が戻ってくる

B ⑧ 紬「安全確認よし」ハ\*独り言っぽく▽

▲間

B ⑧ 紬「ほんと、お兄さんに一言断ってからにするべきなんだろうけど」ハ\*独り言っぽく▽

B ⑧ 紬「でも、起きてたら恥ずかしくてこんな事頼めないもん」ハ\*独り言っぽく▽

B ⑧ 紬「だから……しょうがないよね」ハ\*自分に言い聞かせる感じ▽

▲間

B ⑧ 紬「うん。でもやっぱり……一応確認はとっておこう」

▲短い間

B ⑧ 紬「お兄さん？ お隣、お邪魔しますね〜？」ハ\*小声▽

B ⑧ 紬「確認しましたよ〜？ いいですよね〜？」ハ\*小声▽

▲間

B ⑧ 紬「よし。お兄さんも無言で肯定してくれてる事だし」

A ⑦ 紬「えいっ」

▲上記台詞部分で紬が主人公の隣に寝る

(※距離：近く)

A ⑦ 紬「くうー！」ハ\*小声で喜ぶ感じ▽

A ⑦ 紬「お兄ちゃんと並んでお昼寝とか夢みたい」ハ\*嬉しそう▽

▲間

A ⑦ 紬「身体、もっと近づけてみても大丈夫かな？」ハ\*独り言っぽく▽

▲間

A ⑦ 紬「お兄さんが起きませんように」^\*独り言っぽくV

▲上記台詞を言いつつ紬が更に身体を近づける

(※距離：耳元)

A ⑦ 紬「わー、もう息がかかりそう」^\*独り言きゃっきゃしてる感じV

A ⑦ 紬「落ち着けー私ー、深呼吸、深呼吸」^\*独り言っぽくV

A ⑦ 紬「(\*深呼吸)」

▲間

A ⑦ 紬「よし、落ち着いた」^\*独り言っぽくV

▲間

A ⑦ 紬「それにしてもお兄さん、気持ちよさそうな顔して寝てるなあ」^\*独り言っぽくV

A ⑦ 紬「これだけ喋ってても起きないし、結構眠り深いのかも」^\*独り言っぽくV

▲間

A ⑦ 紬「お兄さーん、気持ちいいですかー？」^\*独り言囁きV

▲間

A ⑦ 紬「あ、今ちょっと笑った気がする」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) 夢でもみてるのかな？」^\*独り言っぽくV

▲間

A ⑦ 紬「さて、お兄さんの寝顔も見てて飽きないけど」^\*独り言っぽくV

A ⑦ 紬「せっかくのチャンスなんだから、私もお昼寝しちゃうと」^\*独り言っぽくV

▲間

A ⑦ 紬「おやすみなさい、お兄さん」^\*独り言囁きV

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター6】

☆時刻：昼 場所：部屋

▲主人公と紬が並んで寝ている状態からスタート

(◇適宜 夏の環境音)

♪S

A ⑦ 紬「(\*近くで聞こえる寝息)」

A ⑦ 紬「ん」

♪E

(◇遠くから黒電話のなる音)

A ⑦ 紬「あ、電話鳴ってる」^\*小さく独り言^

A ⑦ 紬「(\*ため息) そろそろタ無断お昼寝タイムも終了かな」^\*小さく独り言^

A ⑦ 紬「よいしょっと」^\*小さく独り言^

▲上記台詞部分で紬が起き上がる

B ⑧ 紬「(\*小さく笑い) ドキドキしちゃって……………あんまり眠れなかったな」  
^\*小さく独り言^

B ⑧ 紬「でも、一緒にお昼寝出来て嬉しかった」^\*小声独り言^

B ⑧ 紬「(\*小さく笑い) ありがとうございます、お兄さん」^\*小声優しく^

▲短い間

B ⑧ 紬「さーってと、早く電話出なきゃ。お母さんからかなー」

▲上記台詞を言いつつ紬が部屋のの外へ

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター7】

☆時刻：夕方前 場所：部屋

▲主人公は部屋で昼寝中  
※主人公が気付かないうちに、既に紬は部屋の外へ出ています

(◇適宜 夏の環境音)

▲長めの間(夏の音を聞く時間)

▲部屋の外に栞が来る

(※距離：扉越し)

C ① 栞「おいさ〜ん」

C ① 栞「おいさ〜ん、いる〜?」

C ① 栞「栞お部屋に入っているかな〜?」

(※距離：扉越し解除 普通)

C ① 栞「あいごと〜」

▲栞が入室

B ① 栞「栞お昼寝してて、起きたらお姉ちゃんいなかったの。  
おいさん、お姉ちゃんどこ行ったか知ってる?」

B ① 栞「おいさんわからないかあ。じゃあ栞、お姉ちゃんに遊んでもらえない」

▲(※距離：上記2つの台詞を言いつつ主人公の近くにノロノロと移動)  
※B ①からA ③に移動するようにお願いします。

▲間

(※距離：近い)

A ③ 栞「ねーねー、おいさん何してたの?」

A ③ 栞「お昼寝? んふー(\*へらっと笑う) 栞と一緒にだ〜」

A ③ 栞「???」^\*何かを見つけたようなV

A ③ 栞「なんか机の上に紙があるよ。なあにこれ、お手紙?」

▲栞が机のそばに移動 紙を手取る

A ③ 栞「えっと……、ちょっと外に出てきます。お昼寝と一緒に出来て楽しかったです。紬?」  
^\*紙に書いてある文章をたどしく読むという感じV

▲間

A ③ 栞「???」^\*考え中V

▲間



A ③ 栞「あーーーーー！　じゃあお姉ちゃんも一緒にお昼寝してたんだ！」

A ③ 栞「おいさんとお姉ちゃんだけでずるいんだよ。  
栞だけ仲間外れするの、いけないんだよ！」

▲間

A ③ 栞「うゝ（\*ふてくされ）あやまっても、ゆるしてあげないもん」^\*不機嫌▽

A ③ 栞「あとで『おいさんとお姉ちゃんだけ一緒に寝てた』ってお母さんにいう  
^\*ふてくされながら▽

（◇適宜　上記▲部分　▲主人公が焦る  
^ガタツ▽みたいな音で主人公の動揺を）

▲少し間

A ③ 栞「???」

A ③ 栞「どしたの、おいさん？」

A ③ 栞「おいさん、栞と一緒に遊んでくれるの？」

A ③ 栞「やったー！」

A ③ 栞「（\*小首をかしげる感じ）???　でもそのかわり、おいさんと約束？」

A ③ 栞「いいよー。うん…お姉ちゃんとお昼寝の事？　お母さんに内緒？」  
^\*主人公の発言を繰り返している感じ▽

A ③ 栞「うーん（\*思案）………わかった  
ゴカイ、される？　っていうの、よくわかんないけど」  
^\*思案の後、明るく。わかってるけどわかってない感じ▽

A ③ 栞「栞、お母さんに言わないって約束する！」

A ③ 栞「うん。約束！」

A ③ 栞「じゃあお部屋から、おもちゃ取ってくる。　おいさん、ちょっと待ってて」

▲栞が一旦自室へ駆け足で移動

（◇適宜　アウト）

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター8】

☆時刻：夕方前 場所：部屋から神社

▲主人公は部屋で座ってる

(◇適宜 夏の環境音)

▲少し長めの間(夏の音を聞く時間)

▲栞が駆け足で戻ってくる

B ① 栞「おもちゃもってきた」

B ① 栞「えっとね、これだよ。けん玉っていうの」

B ① 栞「???」 ▲小首をかしげる感じ▽

B ① 栞「どしたの、おいさん」

B ① 栞「イマドキ、コフウ……? う………おいさんの言ってること、栞よくわかんない」

B ① 栞「とりあえず、一緒にけん玉やろっ」

▲短い間

B ① 栞「じゃあまずは、栞がお手本をみせます。ぱちぱち」

B ① 栞「う、おいさんちゃんとして。ぱちぱちー!」

▲主人公拍手をする

B ① 栞「えへへ」 ▲\*にへらっと笑う▽

▲短い間

B ① 栞「えっと、ではいきます」

♪S

▲栞がけん玉で遊ぶ それなりにミスをしつつ

※栞けん玉アドリブ(現場相談)

※主人公の周りを走り回る動作とかも欲しいです

(◇上記▲に付随する音 適宜)

♪E

B ① 栞「どう? 栞、上手?」 ▲\*きよとん▽

B ① 栞「おいさんもやる? 栞より上手だったらほめてあげる」

▲主人公がけん玉を渡され挑戦 ※結構うまくいく

(◇上記▲に付随する音 適宜継続)

B ① 栞「お、おいさんすごい。栞そんなできない」

B ① 栞「うー、けん玉はおいさんの勝ちかもしれない」

B ① 栞「だから、けん玉やめて違う事しよ？」

B ① 栞「うーんと、うーんと………あ！パイロットごっこしたい！」

B ① 栞「えっとね、おいさんがロボットで、栞がパイロット」

▲短い間

A ① 栞「おいさん、しゃがんでー」

▲主人公がしゃがむ 栞は背後に回る

(◇適宜 動作音)

A ⑤ 栞「んしょ、んしょっと」

▲上記台詞を言いつつ、栞が主人公の背中から首の付け根を跨ぎ、肩車の形に  
(◇適宜 動作音)

A ⑤ 栞「できたー！ おいさんこのまま肩車ー！」

A ⑤ 栞「えへへへ。栞がパイロットになるの」ハ\*上機嫌▽

A ⑤ 栞「よし、ガチャンガチャン、ウィーン………おいさんロボ、発進！」

▲栞が主人公の頭をポンポンと叩き、主人公立ち上がる

A ⑤ 栞「おおおおお！ たかーい！  
おいさんロボ、このまま玄関に向かって発進！」ハ\*めっちゃはしゃぐ▽

▲適宜 栞が頭を叩いたりする動作は任せます

▲部屋から廊下に出る

A ⑤ 栞「ねーねー、おいさん、もっとガッシャングッシャンして」

A ⑤ 栞「歩く時は、がっしやーん！ がっしやーん！ だよ？」

▲主人公、歩き方をロボットっぽく変更  
(◇適宜 足音調整)

A ⑤ 栞「おー。おいさんロボ、どずどずしてて、かっこいい」ハ\*目を輝かせる感じ▽

▲玄関まで歩いていく

A ⑤ 栞「栞、このまま神社いきたい！ お外に発進ー！」

A ⑤ 栞「？ おいさんロボ、お靴履かなきゃダメなの？」ハ\*きよとん▽

A ⑤ 栞「わかったー。じゃあ一回降りるから、おいさんロボしゃがんで」

▲主人公が一度栞を降ろす

A ⑤ 栞「あいごとー」

▲主人公が靴を出して履く

A ⑤ 栞「あー、そうだー。お姉ちゃん心配するから、お手紙かいてくる」

▲栞が部屋に走ってく 主人公座って待つ  
(◇適宜動作音 あとセミの声とか聞こえてると嬉しいです)

▲トテトテと走ってから止まって振り返る

A ⑤ 栞「おいさん、そこで待っててねー」ハ\*呼びかける感じ▽

▲再びトテトテと走り出す

C ① 栞「お手紙おいてきたー」ハ\*呼びかける感じ▽

▲栞が上記台詞を言いつつ戻ってくる

B ① 栞「ちゃんと『おいさんと遊んでくる』って書いてきたよ」

B ① 栞「栞、えらい？」

B ① 栞「むふふー」ハ\*嬉しそう▽

▲間

B ① 栞「おいさん、もうお靴履けた？」

B ① 栞「じゃあしやがんでー」

A ⑤ 栞「んしょ、んしょ」

▲上記台詞を言いつつ栞が主人公に肩車される

A ⑤ 栞「よーっし、おいさんロボ発進ー」

A ⑤ 栞「地球の平和をまもるんだー」

▲主人公が扉を開けて外へと進む

A ⑤ 栞「神社いくの、まずあっちー」

A ⑤ 栞「ふふっーん」 ※適当に上機嫌な栞のアドリブ(現場相談)

▲少しして立ち止まる

A ⑤ 栞「えっとね、ここ曲がってから、まっすぐ」

▲また進む

A ⑤ 栞「あ、ここ、こっちー」

▲また進む

▲立ち止まる

A ⑤ 栞「この上、神社ー。ここからの階段、栞もおいさんと歩くー」

A ⑤ 栞「うん。おいさんロボ、しゃがんで」

▲主人公がしゃがむ

A ⑤ 栞「ん、しょ」

▲上記台詞を言いつつ栞が肩車から降りる

A ⑤ 栞「おいさん、ここまであいがとー」

B ① 栞「じゃあここ、登って、神社いこー」

▲二人で階段を上る

B ① 栞「神社ー、神社ー、じんじんじゃー」 ^\*よくわかんない鼻歌V

B ① 栞「神社ー、神社ー、じんじんじゃー」 ^\*繰り返しV

▲主人公と栞、神社に到着

A ③ 栞「ついたー」

A ③ 栞「ここ、通るときお辞儀するって、パパが言ってた」

A ③ 栞「えっとー、失礼します！ 栞です」

▲鳥居の前で立ち止まり、上記台詞を言いつつ一礼 主人公も一礼

A ③ 栞「おいさん、神様をお願い事にいこー」

▲境内の奥へと進む

A ③ 栞「神様あっちにいるのー」

▲二人とも立ち止まる 目の前に参拝場所

A ③ 栞「おいさん、お金もってる？」

▲主人公が小銭入れの中身を確認する

A ③ 栞「栞にも、ひとつちょうだい。ここいれるー」

▲主人公が栞に小銭を一枚渡す

A ③ 栞「あいがとー」

A ③ 栞「よーし投げるぞー。んー、えいっ」

▲栞がお賽銭を賽銭箱に投げる  
(◇上記に付随する音)

A ③ 栞「はいったー。おいさんもお金いれて？」

▲主人公もお賽銭を投げる

A ③ 栞「んふ（＊嬉しそう）。じゃあ、鈴しゃんしゃんして、神様お願いしよ？」

A ③ 栞「いくよー？」

▲栞が神社の鈴をならす

▲二人で 二拝・二拍手・お祈り・一礼

A ③ 栞「んーーーー」（祈るアドリブ）

A ③ 栞「栞、ちゃんとお願ひできたよ。 おいさんもちゃんとできたー？」

A ③ 栞「んふー、よかった」ハ＊満足そうに▽

▲間

A ③ 栞「じゃあ、夕方だからお家帰ろー。 おいさん、栞帰りはおんぶがいい」

（◇適宜 アウト）

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター9】

☆時刻：夕方～夜前 場所：神社から玄関

▲主人公が栞をおぶっている状態でスタート

(◇適宜 環境音 夏の夕方)

A ⑤ 栞「んふふー（＊満足そうに）。おんぶも楽しい」

A ⑤ 栞「よし、おいさんロボ、お家に帰るの出發」

▲主人公が歩き出す

A ⑤ 栞「（＊あくび）」

A ⑤ 栞「ねー、おいさん？」

▲上記台詞「おいさん」部分言い終わりで、主人公が立ち止まる

A ⑤ 栞「お家まで帰る道わかる？」

A ⑤ 栞「栞、ちょっと眠くなっちゃったから、お家着くまでねんねしてもいい？」

▲主人公が再び歩き始める

A ⑤ 栞「んふふー（＊満足そうに）あいがとー」

♪S

▲主人公が家に向けて歩く

(◇ここから栞をおんぶしつつ、夕方の田舎を散歩するような形に)

A ⑤ 栞「（＊寝言アドリブ）」ハ＊「もう食べられない」など（現場相談）V

A ⑤ 栞「（＊寝息）」

♪E

▲主人公が家に着いて、玄関のベルを鳴らす

(※紬の声ドア越し)

C ① 紬「はい、開いてますよー」

A ⑤ 栞「ん」

▲栞が目を覚ます

A ⑤ 栞「お家着いた？」

▲紬が扉を開ける

B ① 紬「あ、お帰りなさい。二人ともどこ行ってたんですか？」

A ③ 栞「えへへー、内緒ー」

B ① 紬「あーそうですか。どうせ散歩とかでしょー？

こちら辺に遊ぶところなんてないんだから」ハ\*子供をあやす感じV

B ① 紬「ご飯、もう出来てるからね。ちゃんと手洗ってから居間に来ること」

A ③ 栞「わかったー」

B ① 紬「お兄さんも、しっかり手を洗ってくださいね」

▲紬が廊下の奥へ歩き出す

▲間

A ③ 栞「ねー、おいさん。今日は遊んでくれて、あいごと」

A ③ 栞「おいさん、栞と一緒に楽しかった？」

A ③ 栞「んふふー（\*満足そう）。栞も、楽しかったー」

A ③ 栞「じゃあ一緒にお手で洗って、ご飯食べに行こー」

（◇適宜 アウト）

【チャプターEND】



【DAY1 チャプター10】

☆時刻：夜 場所：居間

▲一同 手を合わせる  
(◇適宜 動作音)

一同「ご馳走様でしたー！」(母B①、紬A⑦、B⑧)

B① 母「かぁー、食った食った」

B⑧ 栞「栞もう何も食べられないー」

A⑦ 紬「すごい量だったね」

B① 母「いやー、若い男がいるんだから、これくらいでも足りるか不安だったんだが」

A⑦ 紬「ちょっと作りすぎだったかもね」

B⑧ 栞「おいさんもお腹いっぱいになった？」

B⑧ 栞「えへへー。栞も食べ過ぎて動けない」

B① 母「さーって、あとは各自風呂入って早めに寝ることー」

A⑦ B⑧ 栞「はいー」  
紬「はいー」

A⑦ 紬「それじゃあ、食器片付けちゃうね」

B① 母「さんきゅー。  
あ、あとスイカ切ってあるから、風呂上りに食いたい奴は食べよ」

B⑧ 栞「栞スイカ食べるー！」

A⑦ 紬「あんた、さっき『もう何も食べられないー』とか言ってたじゃん」

B⑧ 栞「スイカは別だもん！」

A⑦ 紬「はいはい。ちゃんと食べたら歯磨きするんだよー？」

▲上記台詞を言いつつ紬がまとめた食器を台所へ運びに行く

B⑧ 栞「ちゃんとするもん！」

B① 母「さーって、そろそろ風呂でも入るかぁー。どっこいしょ」

▲上記台詞「どっこいしょ」部分でお母さんが起き上がる

B⑧ 栞「栞もお風呂行くー」

B① 母「お、じゃあ栞、一緒に背中流しっこするか」

B⑧ 栞「うんー」

▲上記台詞部分で栞とお母さんが出ていく

【チャプター END】

【DAY1 チャプター11】

☆時刻：夜 場所：部屋

▲主人公が部屋にて食休みをしている状態でスタート  
(※紬ボイス 部屋の外から)

C ① 紬「お兄さん、今お部屋入っても大丈夫ですかー？」

C ① 紬「ありがとうございます、失礼しますね」

▲紬が部屋に入る

B ① 紬「お兄さんは、食後の休憩ですか？」

B ① 紬「（＊小さく笑う）一緒ですね。私もお腹いっぱいなので、ちょっと休憩しようかと」

▲間

B ① 紬「今日は晩御飯、作りすぎちゃいました」

B ① 紬「（＊小さく笑う）まだスイカも残ってるんですよ。正直食べられるか不安です」

B ① 紬「あ、お兄さんスイカ食べられますか？ もう食べるのであれば持ってきますけど」

B ① 紬「お風呂上りに食べる………ですか。（＊小さく笑う）  
確かに、まだお腹膨れてますよね」^\*笑いつつv

▲間

B ① 紬「お母さんと栞のお風呂長くなりそうなんですけど」

B ① 紬「よかったら待ってる間、一緒に縁側で涼みませんか？」

B ① 紬「夜風が気持ちいいですし休憩にはぴったりだと思いますよ」

▲短い間

B ① 紬「ありがとうございます」

B ① 紬「あ、あともう一つ」

B ① 紬「そのー、お兄さんに何か今日のお礼が出来れば嬉しいんですけど」

B ① 紬「今日は私も栞も、いっぱい遊んで貰いましたから」

B ① 紬「肩もみとか、休憩がてら私に出来る事であれば遠慮なく言ってください」

▲長い間

B ① 紬「……？」

B ① 紬「お兄さん？ どうしたんですか、考え込んでるように見えますけど」

B ① 紬「あっ！ もしかして、何かご希望見つかりましたか？」

【チャプター END】

【DAY1 チャプター12】

☆時刻：夜 場所：縁側

(◇夏の夜の音)

▲主人公と紬が縁側に到着した状況からスタート

B ① 紬「んー(\*伸び)、やっぱり縁側に出ると夜風が気持ちいですね」

B ① 紬「(\*小さく笑う) まさかお兄さんが耳かきを希望されるとは思いませんでした」

B ① 紬「でも、私が出来ないような事じゃなくて良かったです」

B ① 紬「栞の耳をいつも掃除してあげてるので、耳かきには結構自信あるんですよ？」

B ① 紬「では早速、準備しちゃいますね」

▲間

B ① 紬「えーっと。私は、ここに座って、耳かきを持ってっ」とハ\*独り言っぽくV

▲上記台詞を言いつつ紬が縁側に座る

B ① 紬「よし。お兄さん、まずは膝枕の形になりましょうか」

B ① 紬「たっ、確かに、ちょっと恥ずかしいですけど、多分これが一番やり易いので」

B ① 紬「それに今は、耳掃除がんばるぞって気持ちの方が強いんです」

B ① 紬「だから、遠慮せず頭を乗せちゃってください」

▲主人公が頭をのせて膝枕の形に

A ① 紬「肩や首、痛くないですか？」

A ① 紬「(\*小さく笑う) では、好きな方の耳を上に向けてください」

▲主人公右耳を上

A ⑦ 紬「おっ。まずは右耳からですね」

▲短い間

A ⑦ 紬「見えにくいので今から顔を近づけますけど

息がくすぐったかったりしたら言ってください」

▲短い間

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) ではでは失礼しまーす」

♪

▲紬が右耳の耳かきを開始

(◇右耳耳かき音 開始 指定まで継続)

(※距離：以下耳かき中は大体耳元になります)

A ⑦ 紬「痛くないですか？」

A ⑦ 紬「まずは手前のほうから掃除していきますね」

A ⑦ 紬「あつ、ここ」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「よーしっ、とれたとれた」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「次はー、あー、こちら辺かな」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「みーつけた」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「この淵は」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「よし、大丈夫かな」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「次は奥の方にと」^\*独り言囁きV

A ⑦ 紬「おー、これは中々。やりがいがありそうです」

A ⑦ 紬「あつ、いえ。そんなに汚れてるってわけじゃないんですよ？」

A ⑦ 紬「ただ、自分で掃除してるだけだと  
どうしてもうまく届かない部分ってあると思うんです」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) だからあまり気にしないでください」

A ⑦ 紬「それに今日、私がしっかり綺麗にしちやいますから」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) はい。このまま大船に乗ったつもりでいてください」

A ⑦ 紬「んー。とれそうなんだけど」

A ⑦ 紬「よし」

▲紬が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 一旦停止)

A ⑦ 紬「次に綿棒で表面の小さな汚れを取っていきます」

(◇右耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A ⑦ 紬「やっぱり綿棒だと細かい汚れも取れますねー」

A ⑦ 紬「少し擦りますね」

A ⑦ 紬「よし、充分かな」^\*独り言囁きV

▲紬が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 一旦停止)

A ⑦ 紬「では、軽く耳かきの頭で拭き取りますね」

(◇右耳耳かき音 毛羽立ってる側 開始 指定まで継続)

A ⑦ 紬「気持ちいですか?」

A ⑦ 紬「少しくくる回しますよー」

A ⑦ 紬「うんっ。こんな感じで大丈夫かな」ハ\*独り言囁き▽

▲紬が一旦手を止める  
(◇右耳耳かき音 一旦停止)

A ⑦ 紬「最後にに軽く息を吹きかけますね」

A ⑦ 紬「ふー、ふー、ふー(何回か軽く息吹きかけ)」

▲紬が主人公の耳に息を吹きかける

A ⑦ 紬「これで細かい汚れは飛ばしちゃいました」

A ⑦ 紬「お兄さん、次は左耳を上にしてください」

▲主人公が左耳を上に向ける

A ③ 紬「ありがとうございます。では左耳も始めますね」

(◇左耳耳かき音 開始 指定まで継続)

A ③ 紬「こちら側も同じ感じでいきますよー」

A ③ 紬「さーって、どんな感じかなー」

A ③ 紬「あっ、ここ」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 紬「ふう」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 紬「もう少しかな」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 紬「よしよし」ハ\*独り言囁き▽

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 紬「では、また綿棒に持ち替えます」

(◇左耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A ③ 紬「緑のほうもしっかりと」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 紬「よーし、綺麗になったかな」ハ\*独り言囁き▽

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 紬「こちら側も、軽く耳かきの頭で拭き取りますね」

(◇左耳耳かき音 綿棒 開始 指定まで継続)

A ③ 紬「こんなとこかな」

(◇左耳耳かき音 一旦停止)

A ③ 紬「最後にまた軽く息を吹きかけますよー」

A ③ 紬「ふー、ふー、ふー」

♪

A ③ 紬「よし。お疲れ様です、お兄さん」

A ③ 紬「これで一通り耳掃除は終了です」

A ③ 紬「もう起き上がって頂いて構いませんよ」

▲主人公が起き上がる

B ① 紬「どうでしょう？ すっきりしましたか？」

B ① 紬「（＊小さく笑う）それならよかったです」

B ① 紬「私も新鮮な感じがして楽しかったですよ」

▲短い間

B ① 紬「さーって、そろそろお風呂も空いたかな？」

▲短い間

B ① 紬「よければお兄さん、先に入っちゃってください」

B ① 紬「私はもう少しここで休んでいきますから」

B ① 紬「はい、どうぞどうぞ。お風呂上りのスイカも待ってますよ」

▲主人公が立ち上がる

▲主人公が立ち去ろうと歩き出す

B ⑤ 紬「お兄さん……そのっ、今日はありがとうございました！」

B ⑤ 紬「宿題したり、お昼寝したり…楽しかったです」

▲主人公が上記台詞「お兄さん」部分で立ち止まる

B ① 紬「おやすみなさい」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY1 チャプター13】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

▲主人公が風呂から上がり、部屋で寝っ転がっている状態でスタート

(◇夏の夜の音)

(※ボイス 部屋の外から)

C ⑧ 栞「おいさーん、いるー？」

C ⑧ 栞「栞、もうねんねするから、おやすみにきたの」

C ⑧ 紬「こーっら、大きい声出さないの。お兄さんちょっと開けてもいいですか？」

▲少し間

▲紬が扉を開ける

(※ボイス 部屋の外から解除)

B ① 栞「あー、おいさん寝てるー」

B ① 紬「すみません、そのまま横になっていてください。すぐ済ませますんで」

B ① 紬「ほーら、おやすみするんでしょ？」

B ① 栞「うんっ！ おいさん、おやすみなさい！」

B ① 紬「(\*小さく笑う) じゃあお兄さん、私たちもそろそろ横になります。おやすみなさい」

B ① 栞「おいさん、ばいばーい」

▲紬が扉を閉める

(◇適宜動作音)

(※ボイス 部屋の外から)

C ⑧ 栞「おいさーん、明日も遊ぼうねー。栞、川いきたーい」

C ⑧ 紬「だーかーらー、夜は大きな声出しちゃダメって言ってるでしょー」

▲紬と栞が自室に戻る

♪S

▲主人公が立ち上がり電気を消す

▲主人公就寝

※このまま田舎の夜の音を聴く

♪E

(◇適宜 フェードアウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター14】

☆時刻：昼過ぎ 場所：川

(◇環境：川 効果音など適宜調整)  
(距離：普通 「Rに二人ともそれぞれいる感じ」 どちらでも可)

A ③ 栞「ついたー！ おいさん！ ついたよ！」

A ⑦ 紬「到着です。ここが村唯一の自慢！ただの綺麗な川です」

A ③ 栞「あづーい！ 栞川で泳ぐー！」

A ⑦ 紬「まあ見たまんまで、ただの川なんですけど。  
一応ここのお水はすごく綺麗で、川魚とかも沢山とれるんですよ」

C ② 栞「いち、にー、いち、にー」◇BGで小さく

C ② 栞「準備体操おわりー！」

A ⑦ 紬「お兄さん、歩き疲れたと思いますんで、よければ川に浸かってみませんか？」

A ⑦ 紬「座って足を浮かべるだけでも冷たくてすごく気持ちいいですよ」

C ② 栞「栞が最初にはいるー！」

▲栞のみ川に駆け出して前方へ移動  
(◇上記▲に付随する音)

C ① 栞「いちばんのりだー」ハ\*大声▽

A ⑦ 紬「こーらっ、危ないから走らないのー。  
あと、入る時はちゃんと靴脱ぐんだよー」ハ\*遠くに呼びかけ▽

▲栞が川に入水  
(◇上記▲に付随する音)

C ① 栞「もうお靴脱いだー」

A ⑦ 紬「(溜息) まったく。言うこと聞かないなあ。いつも走るなって言ってるのに」

(※距離：主人公と紬が石に座ってる間  
栞の声のみ遠くですが、水をかけに来る時などは適宜調整ください)

C ① 栞「きやははは！ つべたくてきもちいー！  
ミサイル発射ー！ どーん！」ハ\*大きくはしゃぐ▽

▲栞が川の水をバシャバシャと立てながら  
(◇上記▲に付随する音)

A ⑦ 紬「お姉ちゃんたちが行くまで  
あんまり遠く行っちゃだめだからねー」ハ\*遠くに呼びかけ▽

C ① 栞「わかってるー」ハ\*大声▽

A ⑦ 紬「(\*ため息) 私たちも川辺に行きましょうか」



▲主人公と紬も川へ移動  
(◇上記▲に付随する音)

A ⑦ 紬「石が多いので、足元注意してくださいね」

▲主人公と紬が川辺に移動

A ⑦ 紬「もう。栞ったら、こんなところにぽいぽい脱ぎ捨てちゃって」

A ⑦ 紬「栞ー、ちゃんと靴はまとめて脱ぎなさいっていつも言ってるでしょ」

C ① 栞「わかった！ 今度からちゃんとする！」^\*大声▽

A ⑦ 紬「（\*ため息）ほんとにわかってるのかなあ」^\*独り言▽

A ⑦ 紬「あ、お兄さんは脱いだらちゃんとまとめて置いてくださいよ？  
あとで探す時、大変なんですから」^\*笑いつつ▽

C ① 栞「はやくはやくー！ 冷たくてきもちいよー！ ほらほらー！」

▲上記台詞「ほらほらー」部分 栞が主人公と紬に対して川の水を飛ばしつつ  
※C①からB①ぐらゐまで移動するようにお願いします。

A ⑦ 紬「きゃっ！ 急に水かけないでよ！ お兄さんの服が濡れちゃうでしょ！」

B ① 栞「濡れても平気だよー。すぐ乾くから。こうげきー」

A ⑦ 紬「つめたっ！ もー、いい加減にしないと怒るよー」

B ① 栞「きやははは、お姉ちゃんが怒ったー。逃げろ逃げろー」^\*「逃げろー」から逃げつつ▽  
※B①からC①へ移動するようにお願いします。

A ⑦ 紬「こーらっ、遠く行っちゃダメだよー？」

(※距離：栞更に遠く)

C ① 栞「おいさーん！ はやくあそぼー！」

▲栞が川の奥に逃げつつ

A ⑦ 紬「全然聞いてないし……（\*ため息）これはあとでお仕置きだな」

A ⑦ 紬「お兄さん、お水かかりませんでしたか？」

A ⑦ 紬「よかったー。栞はあとでしっつかりこらしめておきますんで」

▲間

A ⑦ 紬「私たちは、っと。ここらへんに座りましょうか。  
浅くて水も綺麗な川なので、足休めにはぴったりなんですよ」

▲動作の間

A ⑦ 紬「あ、お兄さんの靴、預かりますね」

▲紬と主人公が靴を脱ぐ 主人公は脱いだ靴を紬に渡す  
(◇上記▲に付随する音 適宜動作音)

A ⑦ 紬「おお、大きいー。」

ほら、栞の靴なんて、一緒に並べると小人の靴みたいに見えちゃいます」

A ⑦ 紬「では、まとめてこの石の傍に置いて、っと」

▲紬が靴をまとめて置く

A ⑦ 紬「さーて…裸足になりましたし、一緒にゆっくり座りましょうか」

A ⑦ 紬「よいしょっ…と」

▲主人公と紬 岩に座って足を水に浸ける

A ⑦ 紬「んっ！ 冷たくてきもちい。お兄さん、このひんやり加減、どうですか？」

A ⑦ 紬「ふふっ、よかった。ここまで暑かったと思いますから、ゆっくり涼んでくださいね」

▲間

A ⑦ 紬「栞！ お姉ちゃんたちはこっちに座ってるからねー」

C ① 栞「ええっつまんない。おいさんもあそぶー」^\*大げさにぶうたれる▽

A ⑦ 紬「ダメ。もうちょっとしたらね。お兄さんは疲れたから、ちょっと休みたいんだって」

C ① 栞「やだー。栞おいさんと遊ぶの！」

▲栞が川でバシャバシャ騒ぎながら

(※遠巻きで栞が騒いでいる声のアドリブが欲しいです (現場相談) 次の栞台詞まで継続)

A ⑦ 紬「(溜息) ……栞ったら、いつもよりはしゃいじゃって」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い) すみません。」

癒しを探しに来たはずが、なんだか子守りみたいになっちゃってますよね」

▲間

A ⑦ 紬「栞、夏休みの間、父に会ってないんです」

A ⑦ 紬「だから、今日みたいに思いっきり遊べるのが、すごく楽しいんだと思います」

A ⑦ 紬「いつも私が肩車してあげようとする、『低いからやだー』って怒られますからね」  
^\*笑いつつ▽

(※遠くから聴こえる栞アドリブ 停止)

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター15】

☆時刻：昼過ぎ 場所：川

(◇適宜 環境音 場所は川のまま)

▲葉は遠くで一人遊んでいます 紬と主人公は横並びでスタート

A ⑦ 紬「さーって、葉が一人遊びに飽きないうちに、私たちはゆっくり涼みましょうか」

A ⑦ 紬「この大きな岩に寝っ転がって、目を閉じると気持ちいですよ」

▲紬が主人公の隣で横になる  
(◇適宜 動作音)

A ⑥ 紬「うーん(\*伸び)。太陽があったかい」ハ\*気持ちよさそうに▽

A ⑥ 紬「お兄さんも、横になってみてください。川の音もいい感じで、多分気に入りますよ?」

▲主人公が横になる  
(◇適宜 動作音)

A ⑦ 紬「どうですか?」

▲短い間

A ⑦ 紬「ふふっ、気に入って貰えたみたいでよかったです」

A ⑦ 紬「川の音って涼しげで素敵ですよね」

▲長い間

A ⑦ 紬「お兄さん、私、しばらく黙ってますね」

A ⑦ 紬「せっかくなんで、自然の音でゆっくり癒されていってください」ハ\*優しく▽

AS

(◇ここから一定時間、環境音のみ)

FE

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター16】

☆時刻：昼過ぎ 場所：川

(◇適宜 環境音 場所は川のまま)

▲主人公と紬は横並びで寝ていて、栞は遠くで遊んでいる状況でスタート

C ① 栞「ねー！ カニー！ー！ カニー！ー！」

A ⑦ 紬「んー、あれ？ ちょっと寝ちゃってたかな……？」ハ\*寝起きV

▲上記台詞を言いつつ、紬が身体を起こす

C ① 栞「みてー！ カニー！ー！ カニとれたー！ー！」ハ\*大声V

A ⑦ 紬「カニがとれたの？」  
見てあげるから、こっち持ってきてごらん」ハ\*遠くに呼びかけV

C ① 栞「お姉ちゃんがこっちきて！ カニさん逃げちゃうからはやく！」

A ⑦ 紬「わかったわかった、今そっち行くからね」ハ\*遠くに呼びかけV

A ⑦ 紬「お兄さん、ちょっと行ってきますね」

A ⑦ 紬「え？ 一緒に行く？  
……あ！ もしかしてお兄さん、実は川遊びが好きだったりしますか？」ハ\*からかいV

A ⑦ 紬「ふふっ、冗談です。ちゃんとかってますから。  
あの子に付き合ってくれてありがとうございます」ハ\*笑いつつV

A ⑦ 紬「栞！ お兄さんがカニみたいだって！ ちゃんと捕まえててよ」

C ① 栞「おいさーん、はーやーくー！」

▲主人公と紬が栞のもとへ歩いていく  
(◇上記▲に付随する音)

(※距離：栞と紬ともに遠く)

A ⑦ 紬「どーれっ？ 大きいの捕れたの？ 見せてごらん」

B ① 栞「これ！ カニ、でっかい。はさみ、しゃきーんしゃきーんしてる」

A ⑦ 紬「ほんとだ！ 結構大きくて元気なカニさんだね。  
あんた指挟まれて泣かないでよ」ハ\*「あんた」からかいV

B ① 栞「栞強いから泣かない」

A ⑦ 紬「はいはい。でも、もうちょっとしたら逃がしてあげなよ」

B ① 栞「どして？ カニさん一緒に帰っちゃダメ？」

A ⑦ 紬「うーん……カニさんにもお家があって、きつと家族がいるからね。  
ひとりぼっちじゃかわいそうでしょ？」

B ① 栞「あー(しばし思案)……カニさん、かわいそう。……じゃあ、栞、バイバイする！」

A ⑦ 紬「よし！ いい子だぞ〜！  
さっ、カニさんにさよならして、岸で日向ぼっこしに行こ？」

B ① 栞「わかった！ じゃあ、カニさんばいばい。おぬしも達者で過ごせな」  
紬「ふふっ。あんた、そんな挨拶どこで覚えたの？」ハ\*笑いつつV

B ① 栞「隣のおばあちゃん、見てるテレビ。どお？ 栞かっこよかった？」  
紬「（クスッ）かっこいいはかっこいいかもだけど  
なんか間違った相手に使うそうで怖いなあ」

B ① 栞「ねえ、おいさん？ 岸までかけっこしよ！ 栞勝ったら、かき氷たべたい！」

A ⑦ 紬「栞、勝手なこと言わないのー。 お兄さん困らせちゃダメだよ」

B ① 栞「??? お姉ちゃん、かき氷いらない？」ハ\*きよとんV

B ① 栞「今日、暑いから、きつとおいしい」

A ⑦ 紬「うっ………」

B ① 栞「ねー、『うっ』ってなにー？」ハ\*きよとんV

A ⑦ 紬「そりゃあ、ね？ お姉ちゃんもかき氷は食べたいよ？  
……でも、今月のお小遣いもうほとんど残ってないの、だから」

▲短い間

B ① 栞「??? おいさんかけっこしなくても買ってくれるのー？」

A ⑦ 紬「私達の案内のお礼に……ですか？  
いえいえそんな！ 大した事はしていませんし、気を使わないでくださいっ！」

B ① 栞「おー。おいさん、お金持ちだ」

B ① 栞「栞、かき氷デラックス！」

A ⑦ 紬「ちょっと、勝手に話を進めないのー！」

B ① 栞「だって、おいさんがー」

A ⑦ 紬「……うーん、ほんとにご馳走になっていいんでしょうか？ 栞だけじゃなくて私まで」

B ① 栞「おいさんが、いいよって言ってる。 お姉ちゃん、かき氷いらない？」

A ⑦ 紬「そ、そうだよねっ！ じゃ、じゃなくて」

B ① 栞「はやくしないと、おいさん買ってくれなくなっちゃうかもしれない。ね、おいさん？」

A ⑦ 紬「そ、そんな待ってよ」ハ\*慌てV

▲長い間

A ⑦ 紬「う、宇治抹茶を」ハ\*ものすごく小声V

B ① 栞「お姉ちゃん、何言ってるかわかんない」ハ\*不服そう▽

A ⑦ 紬「え、えっと……その！ 宇治抹茶金時を食べたいです！」ハ\*大きな目の声▽

B ① 栞「あー。それ前にお母さんに高いって怒ってたやつ」

A ⑦ 紬「う、うるさいな！ せっかくだから食べてみたかったんだもん！ 私のお小遣いだけじゃ高くって全然買えないし！」

A ⑦ 紬「それにあんただって、デラックスかき氷とか言ってたじゃん！」

B ① 栞「うん、栞はデラックス。ねーね、おいさんしゃがんで。肩車」

B ⑤ 栞「えへへー。あいがと」

B ⑤ 栞「んしょ、っと」

▲上記台詞言いつつ主人公の背中から登って肩車の形になる

▲短い間

A ⑤ 栞「よし、おいさんロボ、発進！」

A ③ 紬「あ！ 栞ばかりずるい！ 私がお兄さんの案内係なんだからね！」

A ⑤ 栞「べーっだ！ おいさんロボ、がっしやーんがっしやーんだよ！」

▲主人公と肩車状態の栞走り出す

▲紬はゆっくり追いかける

B ④ 紬「そもそも、私はお姉さんだから、そんな子供みたいなお願いしないで〜」

A ⑤ 栞「おいさん、ストップ！」  
ハ\*一個前の台詞に被せ気味▽

▲栞が主人公の頭を叩き、肩車状態で二人とも停止

A ⑤ 栞「宇治抹茶の人はやくー。早くしないとお母さんに言いつけてやるー」

B ④ 紬「なっ！ お兄さん！ そこでじっとしててください、今お仕置きしちやいますんで」

A ⑤ 栞「きやははは、宇治抹茶の人怒ったー。おいさんロボ発進！」

▲主人公と肩車状態の栞走り出す

C ④ 紬「こらっー！ ていうか、なんでお兄さんまで逃げるんですかー！」

A ⑤ 栞「駄菓子屋あっちだよ！ おいさん、逃げろー」

C ④ 紬「あゝもう！ 待ってってばー！」

(◇適宜 フェードアウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター17】

☆：時刻：夕方前 場所：駄菓子屋前から店内

A③ 栞「かき氷ー、かき氷ー。な〜つにぴったりかき氷ー。  
ウルトラー、ハイパー、デラックスー」ハ\*鼻歌交じりで上機嫌V

A③ 栞「あ！ でも、お菓子も食べたい。 ねーね、おいさん、栞お菓子も食べたい！」

B⑦ 紬「こーらっ。お兄さんの服引っ張らないの！ シャツ伸びちゃうでしょ」

A③ 栞「うー、お姉ちゃんに言ってるじゃない！ おいさん、栞お菓子も食べたい」

B⑦ 紬「そんなに食べたならお腹壊すよ〜」

A③ 栞「栞強いから平気だもん」ハ\*ふてくされV

B⑦ 紬「はいはい。ほーら、ふてくされてないで、駄菓子屋さん入るよ」

▲紬が駄菓子屋の引き戸を開ける

A⑧ 紬「ごめんくださ〜い」ハ\*呼びかけV

A③ 栞「くださ〜い！」ハ\*大声V

A⑧ 紬「かき氷を買いにきたんですけど、駄菓子屋のおじいちゃんいますか〜？」ハ\*呼びかけV

A③ 栞「おじいちゃん、かき氷買いにきた〜」ハ\*呼びかけV

(※距離：おじいちゃんの声のみ遠くから近づく感じ)

C① おじさん(以下：爺)「はいよ〜、ちよい待ってなあ〜。

この声は紬ちゃんと栞ちゃんかねえ〜？」

A③ 栞「そうー。おじいちゃん、かき氷〜」

A⑧ 紬「栞〜。おじいちゃん急かさなの。

ゆっくりで大丈夫ですの〜」

(※距離：普通 方向：正面)

B① 爺「はいはい、いつもありがとさん。栞ちゃん、紬ちゃん、お待たせねえ」

B① 爺「ん？ おや、お兄さん見ない顔だねえ？ ここの辺の人かい？」

A⑦ 紬「おじいちゃん。こちらのお兄さんは夏の間だけウチに泊まってるんです。  
でも昔は近所に住んでたんですよ」

B① 爺「ほへえ〜、そうかいそうかい。年寄りはずぐ顔を忘れちまうけえの。  
いいね〜お兄さん、別嬪さん携えて、両手に華だ」

A⑦ 紬「え？ あ、あの違いますっ！」

B① 爺「お兄さんは紬ちゃん狙いかえ？ さすがに栞ちゃんは小さいから  
あ、でも将来はうちのばあさんと同じくらいべっぴんになるて」

A ⑦ 紬「おじいちゃん！ お兄さんはそういうんじゃないですから！」

A ⑦ 紬「それに、家族ぐるみの付き合いでもあるので  
もはや血縁関係に近いといえるかなんというか」^\*テンパリ小声V

A ③ 栞「おじいちゃん、お花って？ おいさんお花持ってないよ？」

B ① 爺「がはははは。  
華っちゅうのは、栞ちゃんや紬ちゃんみてえな綺麗なお嬢ちゃんのことでの」

A ③ 栞「栞、お花ー！」

B ① 爺「んだんだ、将来は綺麗な御華が咲くけえの」

A ⑦ 紬「はい！ もうその話は終しまいっ！  
おじいちゃん、私達はかき氷を買いに来たんです！」^\*照れ怒りV

B ① 爺「おーおー紬ちゃんはこのわかこわか。  
こりやお兄さんも、もうちっとしたら尻に敷かれてしまうわい」

A ⑦ 紬「お・じ・い・ちゃん？ そろそろ注文してもいいですか？」^\*ゴゴゴゴって怒るV

B ① 爺「ああああ、こりや敵わんで。んで、今日はどのかき氷にするんかね？」

B ① 爺「ウチの駄菓子屋はかき氷の味がいっぱいあるからの、選びたい放題じゃけえ」

A ③ 栞「栞、デラックス！ デラックスかき氷！」

B ① 爺「おー！ デラックスかい？  
栞ちゃんはお金持ちだねえ！ そりやうちで一番豪華な奴だ」

A ⑦ 紬「ちょっと栞！ それってそんな高いやつだったの？」

A ③ 栞「うん。でも栞平気。おいさんが買ってくれる！」

B ① 爺「かっかっか。そうかいそうかい。そりやお兄さんも大変じゃな」^\*笑いつつV

A ③ 栞「ねー。おいさん、大変だー」

A ⑦ 紬「もー、あんたの事なんだからねえー」

A ③ 栞「おいさんね、太っ腹なんだよ！ 栞、早くかき氷食べたい！」^\*おじさんに向けてV

A ⑦ 紬「お兄さん、先ほどから失礼ばかりでほんとにごめんなさい。  
ていうか、そもそもほんとにいいの不安になってきたなあ……」

B ① 爺「んじゃ氷削るから、栞ちゃん、ちょっとまっとってね」

B ① 爺「……あ、そうじゃそうじゃ。んで紬ちゃんとそこのお兄さんはどうすんだい？

B ① 爺「なんもいらんのなら、栞ちゃんの分だけ氷持ってくるけえの」

A ⑦ 紬「えっと、私は……やっぱり悪いので」



A ⑦ 紬「えっ？ お兄さん？」

▲間

B ① 爺「はいはい、お兄さん注文ありがとうね。  
んなら、デラックス一つと宇治抹茶とブルーハワイね  
全部で3つ分の氷持ってくるけえの」

▲おじいちゃん店の奥に遠ざかる

A ⑦ 紬「あ、ありがとうございます！  
……ほら！ 栞もちゃんとお兄さんにお礼して！」ハ\*もじもじ▽

A ③ 栞「おいさんあいがと。栞うれしい！」

A ⑦ 紬「私、両親以外から何かをご馳走になるなんて初めてです！  
…ま、まして、それが男の人なんて……」ハ\*「ま、まして」照れつつ早口▽

A ③ 栞「くるしゅうないー。おじいちゃん早くデラックス作ってー」

A ⑦ 紬「（ため息）もー、なんであんたが偉そうなの。  
あと、おじいちゃん急かしちゃダメだよ」

A ③ 栞「むふふー」

▲おじいちゃんがみんなの前に戻ってくる  
(※距離：普通 方向：正面 おじいちゃん)

B ① 爺「あゝ、ほいほい。待たせたねえ。  
これで今から氷を削って、特製かき氷作るけえの」

▲氷削る機器と氷をカウンターに置く

A ② 栞「おおおお。氷、でっかい！」

A ⑦ 紬「立派な氷ですね！ これで三人分ですか？」

B ① 爺「んゝ、少し大きかったかもしれないなあ。  
ああまあそこは、じいちゃんからお嬢ちゃん達へのサービスかの」

A ② 栞「やった！ 大盛りデラックスになる」

A ⑦ 紬「ありがとうございます」

B ① 爺「んなら氷、削りはじめようかね」

▲おじさんがかき氷を作り始める  
(◇上記 ▲に付随する音 氷を削る音 継続適宜)

A ② A ⑦ 栞「おおおお」  
紬「わあゝ」

A ⑦ 紬「こうやって目の前で見てると、氷を削る音が豪快ですね」

A ② 栞「ごりごりしてる。ごーりごりー！ ごーりごりー！」

B ① 爺「この取っ手をぐるぐる回せば、誰でもできるけえの」

B ① 爺「どれ、栞ちゃんもちよいとやってみつか？」

A ② 栞「やるー。栞かき氷作る！」

A ⑦ 紬「いいんでしょうか？　というか…栞にもできる事なんですかね？」

B ① 爺「できるできる。だくれでもできる。この取っ手を回すだけじゃからのう」

A ② 栞「簡単だ！」

(◇氷を削る音　一旦停止)

B ① 爺「んじゃ、ワシが今削った一人分は、そうねえ、お兄さんの分にしようかねえ」

B ① 爺「栞ちゃんこっちおいで。こりや夏休みの体験学習だて」

A ② 栞「むふふふ」

▲栞がおじさんの傍へ移動

B ① 栞「おじいちゃん、栞なにすればいい？」

B ② 爺「まずは、ここ木の棒んトコしっかり握ってみ？」

B ① 栞「ここを……こう？」

B ② 爺「そうそう、ぎゅーって。したらしっかり力入れて、時計回りにぐるぐる回すだけやて」

B ① 栞「とけい、まわり……？」　　▲\*思案▽

A ⑦ 紬「栞、わかんないのー？　時計回りはお母さんに習ったでしょ？」

B ① 栞「うー。えっと、こっち」

(◇上記▲に付随する　かき氷機の音　継続)

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い)　合ってるんだけど、なーんか当てずっぽうっぽいなあ」

B ① 栞「ぐるぐるー、ぐるぐるー」

A ⑦ 紬「栞、ゆっくりでいいからね。かき氷作る機械、壊さないでよー」

B ② 爺「おおお、栞ちゃん、なかなか筋がいいのう。こりやおいしかき氷になるなあ」

B ① 栞「栞作ったの、おいしいのになる？」

B ② 爺「んだー。これで作ったらお店に行列できるかもしれんなあ。

栞ちゃんが削った氷はデラックスに使うけえ」

A ⑦ 紬「よかったね栞。将来かき氷屋さん開けるんじゃない？」　▲\*笑いつつ▽

B ① 栞「んー……」　▲\*考え込む感じ▽

(◇上記▲に付随する　かき氷機の音　停止)

A ⑦ 紬「どしたの栞？ 黙り込んでるじゃん」

B ① 栞「おじいちゃん」

B ② 爺「???? なんじゃいね?」

B ① 栞「栞が作ったやつほんとに美味しい?」

B ② 爺「んだ、上手にできてるけえの。ほっぺこぼれ落ちるだろうさ」

B ① 栞「んゝ。それなら、おいさんとお姉ちゃんのに使って」  
^\*「んゝ」部分思案 その後1拍入れてほしいv

B ② 爺「??? おゝおゝ、そうかいそうかい（納得）。  
したらお兄さんと紬ちゃんのかき氷はとってもおいしいねえ」

B ① 栞「うんっ」^\*あつけらかんとv

(◇上記▲に付随する かき氷機の音 再開)

A ⑦ 紬「ふふっ、栞ったら」^\*小声v

A ⑦ 紬「ありがと、お兄さんもお姉ちゃんも、栞のかき氷楽しみにしてるからね」

B ① 栞「うん！ 栞、一人でやる。おいさんとお姉ちゃんは、お外で待ってて」

A ⑦ 紬「えゝ、大丈夫かなあ。ぼけーっとしてケガしないでよゝ」

B ② 爺「大丈夫大丈夫、ワシがちゃんと見てるけえの」

B ① 栞「いーからはやく、あっち行って!」

A ⑦ 紬「はいはい、わかったわかった。じゃあ栞に任せるからね」

B ① 栞「うん」

A ⑦ 紬「お兄さんと外のベンチに座ってるから。おじいちゃん、よろしくお願いします」

B ② 爺「はいよ、まかせときゝ」

B ① 栞「まかせときゝ」

▲主人公と紬が駄菓子屋の外へ

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター18】

☆時刻：夕方前～夕方 場所：駄菓子屋前ベンチ

(※ベンチに三人座る場合、左右に栞と紬が座り主人公が挟まれるようにお願いします)

▲駄菓子屋前のベンチに紬と主人公座ってる 栞は店の中の状態でスタート

(◇夏の外 セミの声など環境音 適宜)

▲駄菓子屋の扉を開けて栞が出てくる 後方から運んでくる感じ  
(◇扉の開く音など 適宜)

**B④** 栞「おまたせしました！ 宇治抹茶とブルーハワイのかき氷です！」

▲栞が歩いてかき氷を持ってくる  
※B④からA⑧へ移動するようにお願いします

A⑧ 栞「こちら宇治抹茶になります」

▲紬が栞から宇治抹茶を受け取る

**A⑦** 紬「おー、ちゃんとかき氷になってる。山盛りですごくおいしそう。ありがとね栞」

A① 栞「こちらブルーハワイになります」

▲主人公が栞からブルーハワイを受け取る

B① 栞「それでは、ごゆっくりどうぞ」

▲栞が駄菓子屋の中に戻っていく

A⑦ 紬「え？ あんたどこ行くのー？」

A⑦ 紬「???? お店の中に戻っちゃいましたね」

(※栞とおじさんの声 店の中から)

**C④** 栞「おじいちゃん！ 栞、ちゃんと運べたー！ かっこよくお仕事できたー！」

C④ 爺「おーおー、立派なもんじゃやて。んじゃこれはご褒美じゃな」

**C④** 栞「わー！ でっかい！」

A⑦ 紬「ふふっ。あの子ったら、すっかり駄菓子屋で働いてる気分になってるみたいです」

(◇上記栞の台詞に被せ気味で※編集時被せます)

C④ 爺「よーし、完成じゃな。ほれ、栞ちゃんもお外にかき氷もってき」

**C④** 栞「うんっ！ あいがとー」

▲栞が再び戻ってくる

A ③ 栞「みてー！ みてー！ 栞の、でっかいイチゴ乗ってる！」

A ⑦ 紬「わあー、大きいねー！  
きつと栞が頑張ったから、おじいちゃんがおまけしてくれたんだよ」

A ③ 栞「うんっ、栞がんばった！」

A ⑦ 紬「そうだね。じゃあ溶けないうちに、一緒にベンチ座って食べよう」

A ③ 栞「あーい」

▲栞もベンチに座る

A ⑦ 紬「よーし、準備できた？」

A ③ 栞「できたー！」

▲間

A ⑦ 紬「ではでは、おいしそうなかき氷を作ってくれた栞さんに感謝して〜」  
^\*「ではでは〜」仰々しく▽

A ③ 栞「むふふ〜」^\*得意げ▽

(◇一個前の紬台詞「栞さんに感謝して〜」部分に被せる感じでお願いします※編集時)

A ⑦ 紬「せーの！」

▲「せーの」部分で全員手を合わせる

A ③ A ⑦  
紬「いただきますーす！」  
栞「いただきますーす！」

▲三人でかき氷を食べ始める

▲栞と紬「かき氷を食べているアドリブ」(現場相談)

A ③ 栞「冷たくて、おいしい！」

A ⑦ 紬「ねー、ほんとおいしいね。  
あっ、そうだ栞〜。服にこぼさないでお行儀よく食べてよー？」

A ⑦ 紬「前に栞がシロップこぼした時、  
『ちゃんと見てて』って私がお母さんに怒られたんだから」

A ③ 栞「わかったー」

♪S

▲栞と紬「かき氷を食べているアドリブ」(現場相談)

♪E

A ⑦ 紬「(ため息) 今日暑かったから

かき氷を食べてると身体の芯から冷える気がしますね」

A ③ 栞「うん、なんか頭キーンってなる」

A ⑦ 紬「（\*小さく笑い）それはあんたが急いで食べるから」^\*笑いつつ^

▲間

A ③ 栞「ねえ、おいさんも、おいしい？」

A ③ 栞「栞、その氷削ったの。えらい？」

A ③ 栞「えへへ、褒められた。あ、栞のデラックス、おいさんにもあげる！」

A ③ 栞「おいさん、お顔こっちむけて？」

▲主人公が栞の方向を向く

A ③ 栞「はい、あーーん」

▲主人公に栞が食べさせる

A ⑦ 紬「ちょ！ あんた何してるのっ!？」

A ③ 栞「おいしい？」

A ③ 栞「えへへ。デラックスおいしいでしょー」

A ③ 栞「そうだ！ お姉ちゃんのも、おいさんにあげてー」

A ⑦ 紬「えっ!？」

A ③ 栞「だからお姉ちゃんも、おいさんにあーんってして」

A ⑦ 紬「むりむりむりむり！ 絶対むり!!!」

A ③ 栞「どして?？」

▲沈黙 紬赤面

A ⑦ 紬「そ、そりゃ、恥ずかしいからに決まってるでしょ」

^\*「恥ずかしい」部分すごく小声^

A ③ 栞「???」^\*思案^

A ③ 栞「あー！ わかったー！ お姉ちゃん、おいしいから独り占めしてるんだ！」

A ⑦ 紬「べっ、別にそういうわけじゃなくて」

A ③ 栞「でも、おいしいの独り占めは、ダメなんだよ!」

A ⑦ 紬「だから違うってば」

▲立ち上がり栞が紬のもとへ移動

A ⑧ 栞「けちんぼするなら、貸して!」

**A ⑦** 紬「ちょ、なにをするの！　こら！　それ私の！」

▲葉が紬のかき氷を奪う

A ① 葉「お姉ちゃん、けちんぼはダメなんだよ！　はい、おいさん、あーーん」

▲葉が主人公に食べさせる

A ① 葉「どう？　宇治抹茶、おいしい？」

A ① 葉「えへへ。葉は、優しいの」

A ① 葉「おいさん、もういらない？」

A ① 葉「わかったー。じゃあお姉ちゃんに返すー」

▲葉が紬にかき氷を返そうとする

A ⑧ 葉「???」

A ⑧ 葉「お姉ちゃん？　なんか、お顔まっかだよ」

A ⑧ 葉「ねーねー、おいさん、お姉ちゃんお顔まっかー」

A ⑦ 紬「お、お兄さんが、私のスプーンで………か、関節キス」ハ\*小声V

A ⑧ 葉「ねーえ！　どして、おいさん笑ってるのー」

▲紬が急に立ち上がる

A ⑦ 紬「あ、あの！　わわわ、私先に帰ってご飯の支度手伝ってますから！」

**A ⑦** 紬「そ、その、ご馳走様でしたー！」ハ\*テンパりまくりV

▲上記台詞「ご馳走様」部分位から家に向かって走り出す

※A ⑦からC ⑦へ移動する感じ（後処理？現場相談）

▲長めの間

A ① 葉「おいさん、お姉ちゃんいっちゃったー」

▲短い間

A ① 葉「なんで帰っちゃったんだろうね？　へんなのー」

▲間

A ① 葉「これ、葉が二つとも食べてもいい？」

A ① 葉「やったー」

A ① 葉「うん、食べたなら、おうち帰る」

（◇適宜　アウト）

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター19】

☆時刻：夜 場所：居間

▲一同、手を合わせる

一同「ご馳走様でしたー」（母B①、紬A⑦、B⑧）

B① 母「いやー、うまかったうまかった」

A⑦ 紬「ちょっとお母さん、飲みすぎだよー」

B① 母「いいのいいの。ほら、あれだあれ！

若い男の子がいるからさー。ご飯も酒も、いつもより進むってんだ」

B⑧ 栞「お母さん、顔まっかー」

B① 母「あははは、そんなに、あたし顔赤いか？」

A⑦ 紬「うん、もう真っ赤だよ。

ほーっら、お兄さん付き合わせてないで。そろそろお酒は没収だからねー」

▲上記台詞で紬が立ち上がり「ほーっら」部分で酒瓶を没収  
(◇適宜 動作音)

B① 母「あ、ちよつ、返せよ！ まだ飲んだりないんだから」

B① 母「大体お前らはさあ、昼間こいつに遊んで貰ってたんだろう？

だったらあたしの酒にも付き合わせるのが道理だろうよ」^\*不満そうにV

B⑧ 栞「栞、おいさんと川行って遊んだー！ あと、かき氷買ってもらった！」

B① 母「ほー、かき氷まで買ってもらったのかー。いたれりつくせりだなあ」

B⑧ 栞「いたでり？ よくわかんないけど、かき氷おいしかった！」

B① 母「んで栞、ちゃんと何かお返ししたのか？」

B⑧ 栞「うーん。なんもしてない！」

B① 母「（ため息）お前な。それじゃ立派な大人になれないぞ」

B① 母「いつも言ってるだろう？ ちゃんとお礼はしなきゃいけないんだって。

どーれ、ちよつとお仕置きしてやる」

▲お母さんが栞にちよっかいを出す

B⑧ 栞「きゃははははは」^\*くすぐられてるようにはしゃぐV

B① 母「紬はどうなんだー？ どうせお前もかき氷食ったんだろうー？」

A⑦ 紬「え、えっと、今日はまだだけど、昨日はちゃんとしたよ？

宿題見て貰ったりしたから」^\*小声V

B① 母「それで？」^\*わざとらしくいじわるな感じV



A ⑦ 紬「昨日は……お兄さんに耳かきを」ハ\*小声でどんどん尻すばみになる▽

B ① 母「んー？ 声が小さくて聞こえないぞー」

A ⑦ 紬「昨日はお兄さんに耳かきしてあげたって言ってるの！」  
ハ\*恥ずかしくて声が大きくなる▽

B ① 母「はあ？ 耳かきだあ……？ あーああ、全然ダメダメ。

紬は発想がお子ちゃまだわ」ハ\*わざとらしく、やれやれって感じ▽

A ⑦ 紬「ちっ、違うよ！ これはお兄さんの希望で」

B ① 母「あー、みなまで言うな。

どうせ『私が出る事であれば』とかこいつに言ったんだろ？」

A ⑦ 紬「そ、それは確かにそうだったけど」

B ① 母「かー。栞、お前のお姉ちゃんは甘いわー」

A ⑦ 栞「そうなの？」

B ① 母「うん、そう。

だって自分が出る事しかお願いとして受け付けてないんだから、そりゃあ甘々だ」

B ⑧ 栞「へえー、お姉ちゃん甘いんだー」

A ⑦ 紬「（ため息）だったらどうすればいいわけ？」ハ\*呆れ▽

B ① 母「んー、なんつーかなあ。

もっとさあ、ストレートにこいつが喜びそうな事してやれよ」

B ⑧ 栞「お母さん、おいさんが喜ぶ事ってなに？ 栞もするー」

B ① 母ん「うーん。例えば、そうだなあ……

男相手なんだから、一緒に風呂入って、背中流すとか？」

B ⑧ 栞「お風呂ー！ お風呂栞も入るー！」

紬「そ、そんな事できるわけないでしょ！」

(◇上記台詞 ほぼ同時くらいで※編集時調整)

B ① 母「ああうっさいうっさい。大声出すなよな。耳が痛くなるだろ」

A ⑦ 紬「そ、それはお母さんがバカな事言うから」

B ① 母「バカな事ってなんだよバカな事って」ハ\*不服そう▽

B ① 母「我ながら、かなりのナイスアイデアだろ」

A ⑦ 紬「お母さん？ 次、お兄さんの前で変な事言ったら、一か月お酒禁止だからね」  
ハ\*ゴゴゴゴって怒る感じ▽

B ① 母「ひー、こわいこわい。じゃあ怒られないうちに、そろそろ一番風呂いadakこうかねー」

B ⑧ 栞「栞も一番にはいるー！」

▲お母さんと栞がじゃれ合う

B ⑧ B ①

母「おーよしよし、じゃあ一緒に入ろう」  
栞「きやははは」※など言いつつ（アドリブ現場相談）

（◇適宜 動作音）

A ⑦

紬「（ため息）食器、片付けてくるからね。あとお母さんのお酒も」

B ①

母「あつ、おい！ やめろ！」

▲紬が食器を下げに台所に出ていく

（◇適宜 動作音）

B ①

母「ちえー（\*独り言）。

少しはお母さんのナイスアイデアも検討してみろよー」^\*遠くに呼び掛ける感じ▽

B ⑧

栞「お姉ちゃん、おこってたー」

B ①

母「なあー（\*同意する感じ）。よし栞つ、そいじゃお風呂行こっか」

B ⑧

栞「うんっ！ お風呂入る！」

▲栞が立ち上がる

（◇適宜 動作音）

B ⑧

栞「おいさん、栞お風呂入ってくるー」

B ①

母「よいしょっと」

▲上記台詞でお母さんが立ち上がる

（◇適宜 動作音）

B ①

母「お前も軽く食休みしたら、ちゃんんと汗流せよー」

B ⑧

栞「おいさん、ばいばーい」

▲居間から栞とお母さんが出ていく

（◇適宜 動作音）

（※居間の外から）

C ⑧

母「あーそうそう、あたしの裸見たかったら覗いてもいいぞー」^\*適当な感じ▽

（◇適宜 アウト）

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター20】

☆時刻：夜 場所：風呂場

▲主人公が風呂場の扉を開け 入室 その後扉を閉める

▲主人公が風呂場の椅子をずらし座る

▲主人公がシャワーを流す

(◇ある程度の時間)

B ⑥ 紬「お、お兄さん！ ちょっといいですか！」ハ\*テンパって大きめの声▽

B ⑥ 紬「あ、あの後、母に言われた事を私なりに考えてみたうえで」

▲主人公シャワーを止める

B ⑥ 紬「いいいい、今からとんでもない事を口走りますが、絶対に断らないでくださいっ！」  
ハ\*テンパリ▽

B ⑥ 紬「冷静に断られでもしたら、もう数日は立ち直れないですから……」ハ\*トホホな感じ▽

B ⑥ 紬「そう……だから、これは宣言なんです。宣言ですよお兄さん！」  
ハ\*「そう〜これは宣言」まで独り言小声▽

B ⑥ 紬「最初からお兄さんに決定権はない話なんですっ！」

▲長めの間

B ⑥ 紬「(\*深呼吸)」

B ⑥ 紬「よし……では、宣言します」ハ\*小声独り言▽

▲間

B ⑥ 紬「わ、私、白川紬は、今から準備をしてお兄さんの背中を流しに参りますっ！」  
ハ\*勇気を出した大声▽

▲主人公がシャワーヘッドを落とす

(◇何か『衝撃』って感じの演出をお願いします)

B ⑥ 紬「だっ、大丈夫ですかっ！すごい音がしましたけど！」

B ⑥ 紬「(ため息)よかった。シャワーヘッドの音だったんですね」

▲短い間

B ⑥ 紬「し、仕切り直してもう一度だけ言いますね」

B ⑥ 紬「準備をしたら、お兄さんの背中を流しに来ます……」

B ⑥ 紬「も、もちろん、タオルは巻いてきますし、厳重なガードは敷く予定ですので」

B ⑥ 紬「だからっ、そのっ……」

B ⑥ 紬「(\*一回深呼吸)お、お兄さんも、前はタオルで隠しておいてください」  
ハ\*恥ずかしがる▽

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター21】

☆時刻：夜 場所：風呂場

▲主人公が風呂場の椅子に座ってる 紬は風呂場外にいる状況からスタート

B ⑥ 紬「お、お兄さん、準備が出来たので入りますね」

B ⑥ 紬「し、失礼します」

▲紬が扉を開けて風呂場に入る

▲ヒロインが主人公の後ろへ

A ⑤ 紬「ま、まだ薄目しか開けてないんですけど  
ちゃんと隠してくれてますよね？」^\*おどおど^

A ⑤ 紬「で、ではしっかり目を開けますよ」^\*恐る恐る^

A ⑤ 紬「お。これなら大丈夫そうです」

A ⑤ 紬「(\*小さく笑う) お兄さん、背中大きいですね。  
頼りがいのある後ろ姿って感じがします」

▲短い間

A ⑤ 紬「えっと、あまり長居するのもあれなので、早速ですが流し始めますね」

A ⑤ 紬「あ、あとお母さんには内緒にして下さい。絶対からかわれますから」

A ⑤ 紬「(\*小さく笑う) ありがとうございます」

A ⑤ 紬「お兄さんシャワーヘッドお借りしてもいいですか？」

▲紬がシャワーヘッドを主人公から受け取る

A ⑤ 紬「ありがとうございます」

A ⑤ 紬「身体が冷えちゃったかもしれないので、まずは一度流しましょうか」

SS

▲紬が蛇口をひねってお湯を手に当てて温度確認

A ⑤ 紬「お湯の温度はこれくらいで大丈夫かな」^\*独り言^

A ⑤ 紬「では、首当たりから流していきますね」

▲紬が後ろから主人公にシャワーをあてる

A ⑤ 紬「熱かったら言ってください」

A ⑤ 紬「あ、あと自分からお背中を流しますとか言い出しておいてあれなんですけど……」

A ⑤ 紬「目が合ったりすると恥ずかしいので、あまりこっちは向かないくださいね」

A ⑤ 紬「それに、いくらタオルで隠してるとはいえ、その、あんまり自信ないですから」

A ⑤ 紬「そろそろあったまりましたかね？」

A ⑤ 紬「じゃあシャワーはこのくらいにして」ハ\*独り言▽

▲紬がシャワーを止め、シャワーヘッドを置く

A ⑤ 紬「タオル泡立てちゃいます」

▲紬がタオルを手に取り、ボディソープを泡立て始める

A ⑤ 紬「ボディソープたっぷりですよ」

A ⑤ 紬「よし、充分泡立ったかな」ハ\*独り言▽

▲紬が手を止める

A ⑤ 紬「ではお背中洗っていきますね」

▲紬が主人公の背中を洗い始める

A ⑤ 紬「まずは首の方からしっかり擦ります」

A ⑤ 紬「い、いきますよ」

A ⑤ 紬「ど、どうでしょう？ 力加減とか大丈夫ですか？」

A ⑤ 紬「ではもう少し強く力を入れますね」

A ⑤ 紬「ごしごしごしごし」ハ\*ゆっくり▽

A ⑤ 紬「こんな感じでどうでしょう？」

A ⑤ 紬「（\*小さく笑う）よかった。これでも結構フルパワーなんですよ？」

A ⑤ 紬「ごしごし、ごしごし、ごしごし、ごしごし」ハ\*ゆっくり▽

A ⑤ 紬「このまま腰のほうまで洗っちゃいますね」

A ⑤ 紬「うん、そろそろいいかな」ハ\*独り言▽

▲紬が手を止める

▲紬がシャワーヘッドを持ち、温度を確認後、主人公の背中を流す

A ⑤ 紬「シャワー、流しますね」

A ⑤ 紬「さっきと同じ温度ですけど大丈夫ですか？」

A ⑤ 紬「（\*小さく笑う）わかりました。もう少し熱くしますね」

A ⑤ 紬「どうでしたか？ 背中流し」

A ⑤ 紬「（＊小さく笑う）喜んで頂けたみたいでなによりです。  
勇気を出した甲斐がありました」

A ⑤ 紬「あ、そうだ」

A ⑤ 紬「よければお兄さんの頭も洗ってみていいですか？」

A ⑤ 紬「せっかくなので。ここはとことん経験してみようかと思ひまして」

▲短い間

A ⑤ 紬「どうでしょうか？」

A ⑤ 紬「（小さく笑う）ありがとうございますつ。なんだか楽しくなってきたって。」

A ⑤ 紬「じゃあ一旦シャワー止めますね」

▲紬がシャワーを止めてシャワーヘッドを置く

A ⑤ 紬「シャンプー、シャンプー」

A ⑤ 紬「私の使ってるシャンプーで大丈夫ですか？」

A ⑤ 紬「（＊小さく笑う）じゃあこれで」

▲紬がシャンプーを手に出す

A ⑤ 紬「よし、では洗い始めますね」

▲紬が主人公の頭を洗う

A ⑤ 紬「まずは全体が泡立つように」

A ⑤ 紬「かゆい所はごさいませんか？」

A ⑤ 紬「（＊小さく笑う）やっぱりこの台詞は言ってみたくありませんね」

A ⑤ 紬「耳の周りもしっかりと」

A ⑤ 紬「気持ちいいですか？」

A ⑤ 紬「お客様ー、首のほうを洗いますので、少し頭を前に倒してください」

A ⑤ 紬「（＊小さく笑う）ありがとうございます」

A ⑤ 紬「前髪の方を洗うので、しっかり目を瞑っててくださいね」

A ⑤ 紬「最後は全体を軽くマッサージして、と」

A ⑤ 紬「おっけーかな。よし、頭流しますねー」

▲紬がシャワーヘッドを取り シャワーを流す

A ⑤ 紬「まずはしっかり泡を流して」

A ⑤ 紬「毛穴にシャンプーが残らないように、軽く手を動かしますね」

A ⑤ 紬「痛くないですか?」

A ⑤ 紬「(\*小さく笑う) それならよかったです」

A ⑤ 紬「このままもう一度身体も流しちゃいますね」

▲紬が主人公の身体を再度流す

A ⑤ 紬「もういいかな……うん、しっかり流せたと思います」

▲紬がシャワーを止めて シャワーヘッドを置く

♪E

A ⑤ 紬「お終いです、お疲れ様でした」

A ⑤ 紬「あ、いえいえお礼なんて。私も途中から楽しんじゃってましたし」

▲間

A ⑤ 紬「さーって、あとは軽く片付けて…」

▲栞が風呂の扉を叩く

B ⑥ 栞「お姉ちゃんいるのー? 栞おもちや忘れたから」

A ⑤ 紬「え!? ちょっと待って」

B ⑥ 栞「入るよー」

▲栞が風呂の扉を開ける

B ⑥ 栞「ごめんね。栞おもちや忘れたの………」

▲間

B ⑥ 栞「???」^\*首を傾げる感じ▽

B ⑥ 栞「あれ?」

A ⑤ 紬「えっとね」

B ⑥ 栞「ねー、なんで、おいさんとお姉ちゃん、二人でいるのー?」

A ⑤ 紬「え、えーっと、これはね!

お兄さんの背中とか流してただけで、その、変な事じゃないんだよ?」

B ⑥ 栞「そうなの?」

A ⑤ 紬「仲良しさんだから、背中流してあげてるだけなの」

B ⑥ 栞「じゃあ栞とお母さんと一緒!」

A ⑤ 紬「そう! それと一緒なの!」

B ④ 栞「わかったー！　じゃあ栞おもちや取ったから出てるー」

A ⑤ 紬「あ、ちょっとー！」

C ⑥ 栞「おかあさーーん」

▲栞が風呂場から出ていく

▲栞がトテトテ走って遠くへ

▲間

A ⑤ 紬「行っちゃい………ましたね」

▲間

A ⑤ 紬「（＊ため息）お母さんに知られたら、後ですっごいからかわれるだろうなー」

A ⑤ 紬「申し訳ないんですけど、お兄さんも覚悟してくださいね」

▲短い間

A ⑤ 紬「では私は後で入りなおすので、先に出てますね」

A ⑤ 紬「多分お兄さんが上がる頃には、庭先にいると思いますんで」

A ⑤ 紬「さっき栞、『花火やるんだー』って意気込んでましたから」

▲短い間

A ⑤ 紬「あつ、もしよければ、お兄さんも涼みがてら来てください」

A ⑤ 紬「（＊小さく笑う）ありがとうございます。  
お兄さんが来てくれれば栞も喜ぶと思いますんで」

A ⑤ 紬「はい。では先に上がって待ってますね」

▲紬が風呂場から出ていく

（◇適宜　アウト）

【チャプターEND】



【DAY2 チャプター22】

☆時刻：夜 場所：庭

▲主人公は縁側 栞と紬は庭（縁側前）にいる状態でスタート  
（◇夏の夜の音）

▲主人公は縁側を歩いている

▲主人公立ち止まる

▲紬と栞が花火をしている

※軽く栞と紬が花火をして騒いでいるアドリブが欲しいです（現場相談）

C ② 栞「あっ！ おいさんだー！ おーい！ こっちー」ハ\*遠くに呼び掛けV

C ② 紬「お兄さんも一緒に花火しませんか？」ハ\*遠くに呼び掛けV

▲短い間

C ② 紬「その縁側にある下駄を使ってくださいーい」ハ\*遠くに呼び掛けV

▲主人公が下駄を履いて二人に近付く  
（※距離：近い）

B ① 栞「おいさん、ごめんね。先に花火してたの」

B ② 紬「（\*小さく笑う）やっぱりあの後すぐ花火になっちゃいました。  
ちなみにお母さんは酔っぱらったみたいでもう寝ちゃってます」

B ① 栞「ねー、おいさん、ここから好きなのとっていいよ」

B ② 紬「（\*小さく笑う）といっても、もうあまり残ってないんですけどね。  
お兄さん、これでいいですか？」

▲短い間

B ② 紬「あっ、はい。どうぞ」

▲紬が主人公に花火を渡す

B ① 栞「栞は、この長いのにするー」

B ② 紬「んー、じゃあ私は……これにしようかな」

B ① 栞「お姉ちゃん、栞の火つけてー」

B ② 紬「はいはい」

▲紬が栞の花火に点火

B ① 栞「おおおおお」

B ② 紬「きれいだねー。私もつけようっと」

▲絀が自分の花火に点火

B ② 絀「はい。お兄さんもチャッカマンどうぞ」

▲主人公が自分の花火に火をつける

B ① 栞「おいさんとお姉ちゃんの地味ー」

B ② 絀「（＊小さく笑う）栞のが派手すぎるんだよ」

C ① 栞「（＊はしゃいでる）」

B ② 絀「こーっら。走ると危ないよー」

▲間

B ① 栞「お姉ちゃん、これ消えちゃったー」

B ② 絀「じゃあ終わったやつバケツに入れて。次のやつあげるから」

▲全員バケツに終わった花火を入れる

B ② 絀「もう栞が好きそうなのは残ってないかな」

B ① 栞「えー。花火なくなっちゃったの？」

B ② 絀「ううん。まだあるんだけど、あと残ってるのは線香花火だけだね」

B ① 栞「あー。あの糸みたいなのやつだ。ちっちゃいから栞好きじゃないかも」

B ② 絀「綺麗なんだけどなあ、線香花火。ほら、これあげるから栞も一回やってごらん？」

▲絀が栞に花火を渡す

B ① 栞「わかった」

B ② 絀「じゃあつけるよー」

▲絀が栞の線香花火を点火

B ② 絀「よし、それじゃ私も」

▲絀が自分の線香花火を点火

B ② 絀「はい、お兄さんもうどうぞ」

▲主人公も自分の線香花火を点火

▲間

B ② 絀「小さくぱちぱちして可愛いなあ」ハ＊独り言▽

B ① 栞「うん！　なんか綺麗！」

B ② 絀「でしょ？　私、線香花火が花火の中で一番好きなんだ」

▲葉の花火消える

B ① 葉「ぱーちぱち、ぱーちぱち」

B ① 葉「あつ。丸いぴかぴかの落っこちちゃった」

B ② 紬「そうやってあんまり揺らしてるとすぐ落ちちゃうんだよ。私のもそろそろかな」

▲紬の花火消える

B ① 葉「お姉ちゃんのも落っこちたー」

B ② 紬「お兄さんのは結構続いてますね」

B ① 葉「おー。おいさんの、ぴかぴかおっきい」

B ② 紬「だね。長い時間落とさないとおあなるんだよ。どう？ 面白いでしょ、線香花火」

B ① 葉「なんかね、お空の花火ちっちゃくなってるみたいだった」

B ② 紬「（＊小さく笑う）確かに。形は似てるかもしれないね」

B ① 葉「あー、おいさんのも落ちたー」

▲終わった花火をバケツに全員入れる

B ② 紬「もう一回やりましょうか？」

B ① 葉「やるー！ 次はおっきなぴかぴか作る」

B ② 紬「はい。お兄さんもうどうぞ」

▲紬が主人公と葉に花火を渡す

B ② 紬「せっかくなんで、誰が一番長く持つか勝負しませんか？」

B ① 葉「葉もできるかなー」

B ② 紬「できるできる。ちゃんと揺らさないで持てれば長く遊べるよ」

B ① 葉「わかった！ やってみるー」

B ② 紬「お兄さんも準備はいいですか？」

▲短い間

B ② 紬「火は私がつけてるので、せーのでいきましょう」

B ① 葉「一番なったらご褒美ある？」

B ② 紬「うーん：特には考えてないかなあ。葉は何か思いつく？」

B ① 葉「えっとー：びりの人が一番の人のいう事きくー」

B ② 紬「（＊小さく笑う）それいいね、面白いかもっ」

B ② 紬「お兄さんも異議なしですか？」

▲短い間

A ⑧ 紬「じゃあ付けますよ」

▲紬チャツカマンを点火

A ② 栞「せーのっ！」  
A ⑧ 紬「せーのっ！」

▲三人とも花火に点火

▲間

A ② 栞「がんばれーがんばれー」^\*一生懸命願ってる感じV  
A ⑧ 紬「(\*小さく笑う) お姉ちゃんも負けないぞ」

▲間

A ② 栞「あ」  
A ⑧ 紬「あ」

A ② 栞「おいさん、びりだ」

A ⑧ 紬「(\*小さく笑う) そうだね。一番の人の言う事聞いてもらおう」

▲間

A ② 栞「あつ、栞の落ちた」

A ⑧ 紬「(\*小さく笑う) 私のも落ちちゃった。ほとんど同時だったね」

A ② 栞「うん！ じゃあ栞もお姉ちゃんも一番だ！ おいさんがビリ！」

A ⑧ 紬「(\*小さく笑う) さーってお兄さんに何を願ひしちやおっかな」

A ② 栞「しちやおっかなー、しっちやおっかなー」

A ⑧ 紬「うーん、でも私じゃ面白いお願いできなさそうだから、栞が決めちゃっていいよ」

A ② 栞「いいのー？」

A ⑧ 紬「うん。それでいいですね？ お兄さん」

A ⑧ 紬「(\*小さく笑う) お兄さんも栞のお願い聞いてくれるって」

A ② 栞「よーし、うーんとね」

▲間

A ② 栞「きまった！」

A ⑧ 紬「もう決まったの？ あんまり無理なお願いはしちゃダメだよ」

A ② 栞「うん！ えっとねー、……………栞、次の夏休みも、おいさんと花火したい！」

A ⑧ 紬「（＊小さく笑う）」

A ② 栞「このお願いダメなの？」

A ⑧ 紬「お兄さんも笑ってるし、いいんじゃない？ 私も賛成だよ」

A ② 栞「やったー！ じゃあおいさん約束だからね、来年も花火するの！  
あ、おいさんお手でだして！」

▲栞が主人公に指切りをする

A ② 栞「ゆーびきーりげんまん嘘ついたら針千本のーます、ゆびきったー」

A ⑧ 紬「（＊小さく笑う）よかったね栞、これで来年もお兄さんと遊べるよ」

A ② 栞「うん！ 来年はもっとおっきな花火みたい！」

A ⑧ 紬「（＊小さく笑う）それはどうだろうねー。  
ここら辺じゃ大きな花火大会なんてないから」

A ② 栞「えーおっきいのないのー」

A ⑧ 紬「うーん……………あつ、お兄さんのトコに行けばあるかも」

A ② 栞「おいさんのおうち？ いきたーい！ 栞、おいさんのお家行きたーい」

A ⑧ 紬「私も行ってみたい！ いいですよね、最下位のお兄さん？」  
^\*「最下位の〜」いたずらっぽく

▲間

A ⑧ 紬「（＊小さく笑う）やった！ お小遣い貯めとかなきゃ！」

A ② 栞「おいさんあいがとー！」

A ⑧ 紬「さっそく後でお母さんに話してみなきゃね！」

A ② 栞「うん！」

▲間

A ⑧ 紬「よーし、そうと決まれば、ささっと片付けしちやおう」

A ② 栞「栞もお片付けするー！」

B ① 紬「あ、お兄さん、その袋とって貰っていいですかー？」

B ② 栞「お姉ちゃん、これどこに置けばいいのー」

B ① 紬「それは玄関の方に持っていくから、そこに置いといてー」

（◇紬「よーし、そうと決まれば」から以下 適宜フェードアウト）

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター23】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

▲主人公が部屋の布団で寝転がっている状態でスタート

(◇夏の夜の音)

▲部屋の扉を栞が外から叩く

(◇適宜 動作音)

(※距離：部屋の外から)

(※栞と紬ボイス 扉越し)

C ⑧ 栞「おいさーん、もうおやすみしたー？」

C ⑧ 紬「(\*小さく笑う) ダメダメ。

そんなにしたらお兄さんほんとに寝てても起きちゃうでしょ」ハ\*あははな感じ▽

C ⑧ 栞「うー」

C ⑧ 紬「こういう時はこうやって」

▲紬が優しく扉をノック

C ⑧ 紬「お兄さん、今ちょっといいですかー？ ほら聞いてごらん？」

C ⑧ 栞「(\*きやつきや) いいですかー」

▲短い間

C ⑧ 紬「(\*小さく笑う) ありがとうございます、入りますねー」

▲紬が扉を開ける

▲紬と栞が部屋に入る

B ⑧ 紬「すいません、もう横になられてたんですね」

B ① 栞「でもまだ電気ついてるよ?」

B ⑧ 紬「(\*小さく笑う) うん。ギリギリセーフだね」

▲主人公の横に栞がトテトテ駆けてくる

(※以下栞ボイス 距離：近くなってくる)

B ① 栞「おいさん。栞いっしょにねんねしにきたー」

B ⑧ 紬「(\*小さく笑う) もしお兄さんのお邪魔じゃなければなんですけど

三人で川の字になって横になりませんか?」

(※以下栞ボイス 距離：すごく近い 方向：左)

A ③ 栞「栞、おいさんの隣とったー」

B ⑧ 紬「こーらっ。まだお兄さんが『いいよ』って言ってないよ?」

A ③ 栞「もう枕おいたもん。栞、おいさんと一緒にいいの」

B ⑧ 紬「（\*小さく笑う）どうでしょう？ お兄さん、明日には帰られてしまうみたいなので最後の夜は三人でいたいなーと思ってます」

▲間

B ⑧ 紬「（\*パツと笑う）ありがとうございます！」

A ③ 栞「お姉ちゃんはどこでねんねするのー？」

B ⑧ 紬「んーそうだなあ。じゃあせつかくだから……」

▲上記台詞「じゃあせつかくだから」部分を言いつつ、紬が主人公の隣へ

A ③ 栞「あー、お姉ちゃんもおいさんの隣がいいんだー」

（※以下紬ボイス 距離：すごく近い 方向：右）

A ⑦ 紬「うん、私もお兄さんの隣がいいかな」

A ⑦ 紬「最初はやっぱり緊張したけど、今はお兄さんの隣にいるとなんだか落ち着くんだよね」

A ③ 栞「んふふー。おいさん人気者ー。栞、おいさんすきー」

▲栞が主人公の腕に抱きつく

A ⑦ 紬「（\*小さく笑う）私もお兄さん好きー」

▲紬が主人公の腕に抱きつく

A ⑦ 紬「（\*笑う）」

A ③ 栞「（\*笑う）」

A ③ 栞「おいさんもすきー？」

A ⑦ 紬「あー、それ気になるかもー。どうなんですかーお兄さくん？」ハ\*笑いつつ

A ③ 栞「んふふー」

A ⑦ 紬「ふふっ」

▲間

A ⑦ 紬「あれー？ お兄さん、顔が赤いですよー」

A ③ 栞「あー、ほんとー！ おいさんお顔真っ赤ー」

▲主人公が立ち上がり 電気を消す

（◇適宜 動作音）

B ⑦ 紬「もー、いきなり電気消さないでくださいよー。顔が見えないようにしましたねー」

B ③ 栞「（\*笑う）まっくらだーまっくらだー！」

A ⑦ 紬「ねー、急に真っ暗にされちゃったねー」

A ③ 栞「なんもみえない」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) そうだね」

▲短い間

A ⑦ 紬「(\*ふう、と一息) お兄さん、この二日間楽しかったですか？」

A ③ 栞「栞楽しかったよ? おいさんいっぱい遊んでくれたもん」

A ⑦ 紬「もう、お兄さんに聞いてるんだけどな」ハ\*笑いつつ

A ⑦ 紬「でも、私も栞と同じでほんとに楽しかった。  
特別な何かをしたって訳じゃないのになあ」

A ③ 栞「えー、いっぱいいたよー?」

A ⑦ 紬「そうかなあ、とくにいつもと変わらない気がするけど」

A ③ 栞「栞、おいさんロボで神社いったもん。いつもと違うよ?  
おいさんで行ったの特別だもん」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑う) そっか、そうだよね。  
いつもと同じようで、いつもと全然違うのかも」

A ③ 栞「うんっ!」

A ⑦ 紬「私はー…、一緒に部屋で宿題したり、お兄さんに耳かきしてあげたり」

A ③ 栞「みんなで川も行った!」

A ⑦ 紬「川遊び、涼しくて気持ちよかったね」

A ③ 栞「あと、駄菓子屋でかき氷作って、花火した!」

A ⑦ 紬「あーあれ。不安だったわりに美味しかったですよね、栞の作ったかき氷」

A ③ 栞「んふー(\*得意げ) おいさん、栞かき氷作ったから偉いんだよー?」

A ⑦ 紬「(\*笑う) まーた始まった」

A ③ 栞「あ、あとあと、おいさんとお姉ちゃんと一緒に風呂入ってた!」

A ⑦ 紬「(\*あははははー) それは今並べなくてもいいかな」ハ\*コミカルな苦笑い

A ③ 栞「えー、なんでー」

A ⑦ 紬「なんでも。今思い出すとまだ恥ずかしいし」ハ\*照れ

A ③ 栞「なんでー?」

▲間

A ⑦ 紬「わかんなくていいのっ。さっ、もうこの話お終いつ。  
お兄さんも明日は長旅ですよ? そろそろ静かにして、眠りましょうか」



A ③ 栞「やだー。栞まだ眠くないもん」

A ⑦ 紬「えー。お兄さんはどうです？ そろそろ眠くなりませんか？」

▲短い間

A ⑦ 紬「ほらー、お兄さんも眠くなってきたって」

A ③ 栞「やだー！ 栞だけ寝れないのやだー！」

A ③ 栞「ひとりぼっちでお化け出たらやだもん」ハ\*泣きそう▽

A ⑦ 紬「んーどうしようかなあ」

A ⑦ 紬「あ、じゃあ一緒に羊さん数えようか」

A ③ 栞「羊さん？」

A ⑦ 紬「そう、羊さん。栞知らない？ 羊を数えると眠くなるって」

A ③ 栞「そうなの？ じゃあ栞も羊さん数えるー！」

A ⑦ 紬「お兄さんも眠くなったら寝ちゃってくださいね」

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY2 チャプター24】

☆時刻：夜 場所：主人公の部屋

(◇夏の夜の音)

▲三人並んで寝ている状態でスタート

(※距離：近い)

A ⑦ 紬「それじゃあ羊さん数え始めるよー。」

お姉ちゃんが数えた後に羊さんを増やしていけばいいからね」

A ③ 栞「うんっ」

A ⑦ 紬「よし。(＊コホンと咳払い) 羊が1匹」

A ③ 栞「羊が2匹!」ハ＊大きめ▽

A ⑦ 紬「栞、そんな大きな声出さないの。目を閉じて静かにゆっくり数えるんだよ?」

A ③ 栞「わかったー、お姉ちゃん続けて」

A ⑦ 紬「うん、じゃあ羊が3匹」

A ③ 栞「羊が4匹」

A ⑦ 紬「羊が5匹」

▲そのまま交互に

A ③ 栞「羊が10匹。羊さん増えてきたー」

A ⑦ 紬「そうだね。栞が眠くならないとずっと増えちゃうよ? えっと、羊が11匹」

A ③ 栞「羊が12匹」

▲そのまま交互に

A ⑦ 紬「羊が31匹」

A ③ 栞「(＊あくび) 羊あ32」

A ⑦ 紬「眠くなってきたかな?」ハ＊小声独り言▽

A ⑦ 紬「羊が33匹」

A ③ 栞「羊、34」

A ⑦ 紬「ハ＊小さく笑う▽羊が35匹」

A ③ 栞「羊…36」ハ＊「36」部分の3は消えかけ▽

A ⑦ 紬「羊が37匹」

A ③ 栞「羊、36」

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）羊、増えなくなっちゃった」

▲短い間

A ⑦ 紬「葉？ そろそろねんねする？」^\*小声V

A ③ 葉「羊、さん：（＊むにやむにや）」

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）おやすみ」^\*優しくV

▲短い間

A ⑦ 紬「お兄さんは？ （＊小さく笑う）やっぱり。まだ起きてますよね」^\*小声V

A ⑦ 紬「私、このまま数えてもいいですか？」^\*小声V

A ⑦ 紬「ありがとうございます」^\*小声V

A ⑦ 紬「では、羊が38匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A ⑦ 紬「羊が50匹」

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）50匹まで来ると、結構大きな牧場ですね」^\*小声V

A ⑦ 紬「トリミングするのが大変そうです」^\*小声V

▲短く間

A ⑦ 紬「えっと、羊が51匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A ⑦ 紬「羊が70匹」

A ⑦ 紬「お兄さん、まだ起きてますか？」^\*小声V

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）私もだいぶ眠くなってきました」^\*小声V

A ⑦ 紬「ここまで数えたのは初めてですけど、結構効果あるんですね」^\*小声V

A ⑦ 紬「でもまだまだ増えますよ」。羊が71匹

▲そのまま紬が一人で数える

A ⑦ 紬「羊が90匹」

A ⑦ 紬「（＊あくび）羊が91匹」

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）私もそろそろかなあ」^\*小声V

A ⑦ 紬「ふう、あとちょっと」

A ⑦ 紬「羊が92匹」

▲そのまま紬が一人で数える

A ⑦ 紬「羊が100匹」

A ⑦ 紬「ふう。ついに大台に乗りました」

A ⑦ 紬「きりもいいし（＊伸び）ここでお終いにしようかな」

▲間

A ⑦ 紬「ハ＊小さく笑う」お兄さんも、もう寝ちゃったかな？」

A ③ 栞「んー、おいさん……」ハ＊寝言」

▲上記台詞で栞が主人公に抱き着く

▲紬が上半身だけ起き上がり、主人公の様子を見る

A ⑧ 紬「（＊小さく笑う）栞ったら、お兄さんに抱きついちゃってる」

▲紬がまた横になる

▲間

A ⑦ 紬「私もこっち側に抱き着いちゃおっと」

A ⑦ 紬「（＊小さく笑う）今日はいいい夢見れそうかも」

▲間

A ⑦ 紬「おやすみなさい、お兄さん」

♪S

栞と紬の寝息  
(◇秒数適宜)

♪E

(◇適宜 アウト)

【チャプターEND】

【DAY3 チャプター25】

☆時刻：朝 場所：玄関前

(◇環境音：夏の朝)

▲主人公が玄関を開ける

B ⑤ 母「忘れ物してないちゃんと確認しろよ」

B ④ 紬「私、バス停まで見送りに行ってくるね」

B ⑥ 栞「栞もいく!」

B ① 母「んじゃあまあ、またいつでも遊びに來い。うちの旦那も会いたがってたからさ」

B ① 母「あ、あとお前、来年はこいつらと花火見るとか約束したんだろ?」

A ③ 栞「おいさん、指切りしたもん! 栞と花火見に行くんだよ!」

A ⑦ 紬「うん! お兄さんのお家、遊びに行くんだから」

B ① 母「あははははは。ちゃんと子供との約束は守ってやれよ。  
なにせ母親の言葉真に受けて、風呂場に突撃するほど純粋なガキだからな」

A ⑦ 紬「いつ、今それは関係ないでしょ!」  
それにお兄さんはそういう適当なタイプの人じゃないんだから!」

A ③ 栞「そうだよ! おいさん、約束守るもん!」

B ① 母「おーおー。お前、やたらこいつらに懷かれてるじゃないか」

B ① 母「なんか特別な事でもしたのか?」

A ⑦ 紬「ううん、なんにも。でも特別だよねっ栞?」

A ③ 栞「うん! なんにもだけど特別だよっ!」

B ① 母「カッッッ。よくわっかんねえなあ。あー、まあいいや。そろそろ時間だろ?」

B ① 母「気を付けて帰れよ! んじゃ栞、紬見送りよろしく」

A ⑦ 紬「行きましようか、お兄さん」

▲主人公が荷物を持ち玄関の外へ

▲主人公と紬と栞が歩き出す

C ① お母さん「また来いよなー! あと、身体には気をつけろよ」

(◇適宜アウト)

【チャプターEND】

【DAY3 チャプター26】

☆時刻：朝 場所：バス停

(◇環境音 夏の朝)

A ⑦ 紬「そろそろバスが来る時間ですね」

A ③ 栞「あつーい！」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い) うん、今日も暑いね」

A ⑦ 紬「そういえば、お兄さんがうちに泊まっている間ってずっとお天気でしたよね」

A ③ 栞「うんっ！ いっぱいお外で遊べた！」

A ⑦ 紬「楽しかったね。それに来年の楽しみもできちゃったし！」

A ③ 栞「おいさん、花火大会、約束だかね！」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い) 一年先かぁ。長いようで気が付いたらあつという間なのかも」

A ③ 栞「栞、いっぱい食べておつきくなる！」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い) 私も少し大人っぽくなればいいなあ」

A ③ 栞「栞、おつきくなって、綺麗になって、おいさんのお嫁さんになるんだよ？」

A ⑦ 紬「(\*小さく笑い) なにそれ……。……でも、ちょっといいかも」  
^\*「でも、ちょっと」小声▽

A ③ 栞「あーお姉ちゃんはダメなんだよ！ 栞がおいさんのお嫁さんなの！」

A ⑦ 紬「べ、別にそういう訳じゃっ」^\*テンパリ▽

A ③ 栞「おいさん、ほっぺ出して〜」

A ③ 栞「うー……、ちゅっ」

▲栞が主人公の頬にキス(※子供のかわいいやつです)

A ⑦ 紬「あっ！ アンタなにしてっ!？」^\*テンパリ▽

A ③ 栞「むふふー……。好きな人にするってお母さん言ってたー」^\*ご機嫌▽

A ⑦ 紬「だからって……!」

A ⑦ 紬「///」^\*くううーって感じで照れてる▽

A ③ 栞「あー……! あっち! バス来たー!」

▲遠くから迫るバス

A ⑦ 紬「あーもうっ! ほら、お兄さん! 荷物持ってくださいっ」

A ③ 栞「おいさん、ダッシュダッシュ〜」

A ⑦ 紬「忘れ物ないですかっ？」

A ③ 栞「おいさん、栞お手紙かくね」

A ⑦ 紬「あつ、私も！ ちゃんとお返事書いてくださいよー」

▲バスが停車

A ⑦ 紬「それじゃあ……」

▲バスの扉が開く

A ③ 栞「おいさん、ばいばいっ！ 栞、楽しかった！」

A ⑦ 紬「私も……」

▲主人公がバスに乗り込もうと動く

B ⑥ 紬「あのっ、お兄さん！」

▲紬が駆け寄り、主人公の頬にキス

B ④ 栞「あーーーーー！ お姉ちゃんがチューしたーーーーー」

A ⑦ 紬「わ、私のファーストキスまであげたんですから」ハ\*小声V

A ⑦ 紬「ちゃんと来年の約束守ってくださいね！」

▲紬がバスを見送る形に戻る

B ⑥ 紬「さ、さあ、早く乗ってください！ バスが出ちゃいますよ」ハ\*照れつつV

▲主人公バスに乗り込み、窓を開ける

B ③ 栞「お姉ちゃんお顔真っ赤ー」

B ③ 紬「うるさいー！」

▲バスの発車が鳴り、バスが発車

C ④ 栞「おいさん、あいがとー！ー」

C ④ 紬「お兄さん！ 元気でいてくださいね！ー！」

B ⑦ 運転手「発車アナウンス」

C ④ 栞「ばいばーーーーーい」

C ④ 紬「さようならーーーーー」

(◇適宜 アウト)